
神様が宿る男

嶋 雄一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様が宿る男

【Nコード】

N7112W

【作者名】

嶋 雄一

【あらすじ】

天乃神人24歳。コンピュータソフト製作会社に入社して2年になる。身長170センチ、体重90kgのメタボ体型だ。生まれつきスポーツはまったくダメの運動音痴だが、正義感だけは人一倍強い。ただしその正義感は、いつもいい訳ばかりで実行されたことがない。そんな矢先、父親の神彦が交通事故で亡くなった。それを境に神人の人生が大きく変わり始める。

運動音痴でメタボの体型は2週間で25kgも体重が減り、凄まじ

い身体能力を持った身体へと変化した。そればかりか神と等しい力、神等力まで身に付いたのだ。それは身に付いたというのではなく、神彦が亡くなったことにより、神彦から神人に受け継がれたものだった。

天乃家は先祖代々、一子相伝の神を受け継ぐ家系なのだ。天乃家の男子の中にある神宇宙に、神が居るのだ。神宇宙の神から全てを教えてもらった神人は、その衝撃の事実に驚愕する。

神を受け継ぎ神等力を身に付けた神人は、悪の道に走った人たちの潜在意識が発するSOSに導かれ、神等力でなければ解決できない問題に直面するようになる。それは神を引き継ぐ天乃家の宿命であった。超能力をも凌駕する神等力とは・・

第1章 神を受け継ぐ家系

ピーポー、ピーポー、ピーポー、救急車のサイレンの音が、いつもとは違うように神人には聞こえる。そう聞こえる理由は分かっていた。救急車で運ばれているのは父親の神彦だからだ。サイレンの音は、「助けて！」「助けて！」と叫んでいるように聞こえる。

神人は眠っているように見える父親の顔をじっと見つづけている。救急車は神人が何を思っているのかなど無視するように、助けて！助けて！とサイレンを鳴らしながら病院へ向かって走っていた。

病院へ到着すると、神彦を乗せたタンカは外科手術室へと運ばれた。緊急手術だ。一刻の猶予もない。神人は手術室の前で手術が無事終わるのを祈りながら待った。神人に出来ることは父の無事をひたすら神に祈るだけだ。

あまの じんと
天乃神人二十四歳。大学卒業後、コンピュータのソフト制作会社に就職し今年で丸二年になる。仕事はソフトの開発と営業を兼務している。

神人はどこにでもいるごく普通の若者だ。小さい頃から手先が器用で、図工の時間が一番好きだった。逆に苦手なのは体育。自分でもイヤになるぐらい運動神経が鈍く、徒競走では女子にも及ばず万年ビリ。勉強は出来たがクラスで目立つのは体育会系の生徒だ。

初恋は小学五年生のときだった。相手の名前は島崎仁美。美人ではないが、男子を惹きつける独特のオーラがあった。神人もそのオーラの餌食になった一人だ。彼女は男子生徒の憧れの的だった。中学の入学も段々と近づき、思春期に近づいた男子生徒の間では、彼女をめぐって静かな火花が散っていた。神人もその輪の中にいるのだが、勉強で一歩リードしたと思っても、体育でそれが帳消しになるどころかマイナスになっていると思っている。

体育の時間になると、俄然、体育会系の男子が目立つしカッコいい。反対に、頭は良くても運動音痴の非体育会系の男子はカッコ悪い。五十メートルを十秒近くかかって走る神人は、カッコ悪いどころかミジメだった。

鉄棒では逆上がりも出来ない。跳び箱はたったの三段すら飛べない。夏のプールときは五メートルも泳げない。ソフトボールではバッティングも守りも走りもダメ。体育の時間はいつも皆の笑いものだ。

天は二物を与えずと言うが、体育会系の男子にしても神人にしても、それは当てはまった。

体育会系の中でも村島健太は特に運動神経が良かった。短距離走も長距離走も早い。ソフトボールは、打っても投げて守っても他の生徒より抜きん出ている。とにかく村島は体育の時間だけは目立った。カッコいいのだ。

神人は運動音痴を勉強でカバーしようと思った。もともと頭のいい神人は、島崎仁美を振り向かせるために一生懸命勉強した。その結果成績は学年トップを守っている。村島は勉強に関してはビリカブービーだ。

外見はポツチャリの神人、対照的に村島はスポーツマンそのものだ。小中学校のとき女子にもてるのはスポーツが出来るか頭のいい男子だ。そういう意味で神人と村島は女子に人気があったが、神人は島崎仁美しか眼中になかった。それは村島も同じだ。神人と村島対照的な二人だが不思議と馬が合い、親友と呼べるほど仲がいい。ただ、島崎仁美を巡っては二人はライバルだ。

村島は中学二年になって身長は百七十五センチになり、より精悍に変わった。野球部のエースとして活躍している。

神人は相変わらずの運動音痴でポツチャリ体型は変わらないが、身長は百六十センチになった。そんな共通点のない二人に唯一共通点がある。それは自分の思いを島崎仁美に打ち明けられないという引っ込み思案な性格だ。

時は流れ中学を卒業した神人は、現在に至るまで村島とも島崎仁美とも会ってない。会う機会が一度もなかった。高校卒業後、小学校の同窓会があったのだが、その日はあいにく都合が悪く神人は出席できなかった。

運動音痴の神人は小さい頃から一度も殴り合いの喧嘩をしたことがない。口喧嘩はしても殴り合いの喧嘩にはならない。それは殴りあいになる前に神人が逃げるか謝るからだ。運動神経の鈍い神人は、喧嘩をしても負けることは目に見えていた。

正義感だけは人一倍強いのだが、正義感を発揮すると身の危険に及ぶこともある。神人は危険を避けるだけの体力も何もない。避けるとしたら自分以外の誰かの力を借りるしかない。例えば警察官だ。

通勤電車の中で、神人はしばしば正義感が疼くような光景に出会うことがあるのだが、それを見て見ぬ振りをするのが常だ。自分の身に危害が及ぶのを考えると正義感は疼くどころか跡形もなく急激に萎んでしまう。萎んでしまった後、必ず後悔の念にさいなまれる。

昨日の夜もそんな場面に出くわした。夜八時ごろ神人が帰りの電車に乗り込んだ時、八十歳過ぎと思える老婆が乗ってきて神人の隣に立った。車内は混んでいて、二人が乗ったとき席は空いていなかった。背の低い老婆は吊り革に手が届かない。神人の前のベンチ席に座っているのは、人相の良くない大きな男だ。三十歳前後に見える。バッグを横に置いて二人分の席を占領している。

神人の正義感が雨後の竹の子のように急速に姿を現した。目の前の男にバッグをどけるように言えば済むのだが、そのひと言が出な

い。竹の子は途中でポツキリ折れると最初から何事もなかったかの
ように、神人は目を閉じて吊り革を掴んだ。

電車が動き始め、老婆は吊り革も掴めずにふらついている。そんなところに運良く乗務員が現れ、神人の前の男に注意した。

「お客様、バッグはヒザの上か棚の上に置いていただけないでしょうか」

男は怒ったような目で乗務員を見たが、言われたことに従った。

「お婆ちゃん、席が空きましたから座ってください」

乗務員は優しい笑顔で、神人の隣の老婆を促し座らせた。

「ありがとうございます」

老婆は深々と乗務員に頭を下げ、隣の男にも礼を言った。男は恐縮したような表情で軽く頭を下げ、読んでいた週刊誌に視線を戻した。後悔の念にさいなまれ老婆に視線を合わせることが出来ず、その場に居づらくなった神人は、伏し目がちに視線を落とすと隣の車両に移動した。

後味の悪い思いを引きずりながら帰宅した神人に、もう一人の神人が現れ、触れられたくない今日の出来事に対して質問をしてきた。「神人。お前は何て卑怯な人間なんだ。自分さえ良ければ人はどうなってもいいのか？ お前のせいでお婆さんは辛い思いをしてたんだぞ」

もう一人の自分は厳しく叱責した。別の自分から叱責されると、神人が言うのは決まっている。弁解だ。

「違う。俺は注意しようとしたんだ。でも何故俺が注意しないといけないんだ？ 他にも見てる人はいたんだ。どうして俺だけ責めるんだ！」

「俺はお前に聞いてるんだ！ お前はどんなんだ？ 自分を悪くな

「いと思ってるのか？」

「そうじゃない。注意して自分に暴力を振るわれたらと思うと出来ないんだ。俺は体力もないし喧嘩もしたことがない。人を助けて自分が痛い目に合うのはイヤだと言ってるだけだ」

「それなら今の逆で、もしお前に体力があって喧嘩が強かったら、見て見ぬ振りはいしないのだな！」

「当たり前じゃないか」

いつもこのパターンで自問自答は終わる。それが神人にとって後悔の念から開放される唯一のストーリーとなっている。結果的には言い訳の結末だ。言い訳の結末がもたらすのは、後味の悪い何ともいえない嫌な思いだ。

運命というのは不思議なもので、時々正反対のものを見せてくれる。正確には見せつけられるのだ。

それはいくつかの偶然が重なった出来事だった。ある晩、仕事を終えた神人は、いつものように帰りの電車に乗り込んだ。車内は帰宅の人で満員とまではいらないが、神人が乗り込んだ時に空席はなく混んでいた。

ドア寄りの場所は混んでいたが、車両中央にポツカリと三人ほど立てる空間が見えたので、神人はそこへ進んだ。その空間は正義感のない人は入ることを許されない、異次元の場所だった。

異次元の空間を作り出しているのは、暴力の匂いを発散させて座っている、二十代後半ぐらいの大柄な男だ。車内は混んでいるにも関わらず足を組み、横柄な態度で座っている。荷物を座席に置き三人分の席を占領している。

神人は男の前に立ち、「しまった！」と思ったが、徐々に人が増えていて他に行く場所がない。神人の左右には一人分の異次元空間があるが、誰もその空間に立とうとはしない。

発車五分前に、その異次元空間に二人の乗客が入ってきた。一人は荷物を持った老婆、一人は身長が百八十センチを超えている若者だ。神人は二人に場所を譲るために、男の前から少し横に移動した。老婆が立った場所は男の正面で、神人、老婆、若者という並びだ。神人は老婆を座らせたいと思ったが、目の前の男に声を掛ける勇氣は出てこない。心の中で自分の情けなさを老婆に詫びるしかなかったが、神人の思いが通じたのか、老婆の隣の若者が男に声を掛けた。

「すみません。お婆さんを座らせてもらえませんか」

男は目をつぶって寝たふりをして、若者の声にまったく答えようとしない。

「すみません・・・」

若者は男の肩を軽く叩きながら言った。男は目を開けると、申し訳ないといった表情の若者に、怒りのこもった視線を浴びせ脅すような口調で言った。

「なんやお前！ 人が寝てるのを起こしやがって。文句あんのか！」

男の声に車内は水を打ったように静まり返った。誰もが若者の次の出方を待っている。神人は自分が言われたかのように身体が硬直して動けない。金縛りにあつたような感じだ。

男の声に若者は視線で答えた。穏やかだった表情が険しくなっている。その視線には男を威圧する迫力があつた。男は自分の敵う相手ではないことを知ると慌てたように立ち上がり、ドアが閉まる直前に降りていった。

神人の目の前には三人が座れる空間が現れた。若者は老婆を座らせると自分も座った。神人も座れるのだが、自分は座る資格がないと思った神人は、席の前から逃げるように若者の前に移動してつり革を掴んだ。

「俺はなんて情けない男なんだ」自分自身の態度に打ちひしがれ、ガツクリと肩を落とした神人の視線が若者の視線と合った。

「神人じゃないか！」

視線を外そうとした神人は、若者が放ったひと言に再び視線を戻した。

「俺だよ。村島だよ。思い出したか？」

「おおーお、健太かあ！ 誰だか分からなかった。久しぶり！」

二人はついさっきの男のことなど忘れ、約十年ぶりの再会に時の流れも忘れ小声で語り合った。運動神経抜群の村島は、ひとつのスポーツに特化していれば必ず頭角を現していたはずだ。ところが中学の時は野球、高校時代は柔道、大学の際は合気道とバラバラだった。

た。それ故、どれを取っても中途半端で大成していない。そんなことを知る由もない神人は、親友だからこそ言える言葉を村島に遠慮することなく浴びせた。

「お前が羨ましいよ。何の苦勞もストレスもないように見えるんだけど・・・」

「アホかお前は。そんな人間がいるわけじゃないじゃないか。俺をそんな風に見てるんだったら、お前はアホだぞ」

「健太ちよつといいか・・・」

そう言つと神人は村島の耳の近くまで顔を近づけ、他の乗客に聞こえないように周りに気を配りながら言った。

「さっき男に注意した時、恐くなかったのか？」

「まあ、恐くないと言つたらウソになるけど、喧嘩して負ける気はしないからな・・・」

村島の勇氣は、自らの体力と喧嘩の強さに裏打ちされたものだった。やっぱり喧嘩の弱い俺みたいな人間は関わり合いにならないほうがいいんだと、神人は納得した。それは納得というより、自分の後ろめたさの気持ちをかばう為の勝手な解釈にすぎなかった。

神人はひたすら無事を祈りながら待つしかなかった。隣では母親の京子も同じ想いで待っている。手術は六時間にも及んだ。手術室のドアが開き、移動ベッドに乗せられた神彦が出てきた。口には酸素マスクが付けられ、眠っているように見える。手術は成功だったのか？ 神人と京子の思いに答えるように、主治医が説明を始めた。「出来る限りのことはしましたが、内臓と脳の損傷がひどくて、助かったとしても後遺症が残るでしょう。今夜が山場です。後は祈るだけです」

神彦は病室に運ばれ、ドアには面会謝絶の札が掛けられた。

ことの始まりは、神彦と神人が久しぶりに一緒に飲みに行った夜だった。まだ五月半ばだというのに、今夜は何故か蒸し暑い。まるで熱帯夜のような感じた。こんな夜は冷えた生ビールを飲むに限る。

「お前と一緒に飲むのは久しぶりだな」

神彦は嬉しそうに言った。

「久しぶりも何も、僕が社会人になってから初めてだよ」

生ビールで喉の渴きを潤した神人が、生き返ったという表情で言った。今夜の生ビールは格別な味がする。

「そうかあ。じゃあ、前に一緒に来たのは大学生の時になるなあ」

神彦は神人との時間が余程嬉しいらしく饒舌になっている。神人の酔いが回るほどに親子の会話は弾み、楽しい時間が過ぎていった。普段なかなか話す時間のない神人だったが、何故か今夜は神彦の様子に気になった。

「今夜は楽しかったよ。これで思い残すことはないな」

「父さん、どうかしたの？ 様子がおかしいよ。まるで死ぬ前みた

いな口ぶりだよ」

「人生いつ何が起きるか分からんからな。母さんのこと頼んだぞ」
「なんだよ。どうしたの。飲みすぎじゃないの？ 大丈夫？」

神人は神彦の目に光るものがあるのを見つけた。さっきの言葉といい、涙といい、今夜の父さんはなんだか変だ。神人はその理由を知りたかったが、神彦は、「何でもなし」を繰り返すだけだ。

二人が店を出たのは午後十時半。七時半から飲み始めたので三時間飲んでいたことになる。酔っているようには見えないが、店を出て歩いている時も神彦の視線は遠くを見ており、何だか今夜限りで遠くへ旅立つ旅人みたいに見える。

店を出た二人が五分ほど歩いた時だ。後ろから蛇行運転しながら、一台の黒い乗用車が迫ってきた。明らかに飲酒運転と思えるその乗用車が、突然急加速した。運転している男はハンドルに頭を付けている。泥酔状態だ。

急加速した乗用車は、神彦と神人目がけて突っ込んできた。その瞬間、不思議なことが起きた。

二人ともクルマに跳ねられて当然の状況だったが、神人の身体がまるで瞬間移動したかのように、その場所から五メートルほど移動したのだ。神彦はそのまま跳ねられ頭蓋骨折の重傷を負った。内臓もやられている。神人は、神彦が咄嗟に自分を押して助けてくれたのだと思った。運動音痴の神人だけだったら確実に跳ねられていただろう。

面会謝絶の病室の中で、神人はひたすら祈り続けた。自分を身をもって守ってくれた父親を、こんなことで死なせるわけにはいかない。まだ何も親孝行らしきこともしていない。それにもまして、死ぬには余りにも早すぎる。

祈り続けている神人を、深夜零時を過ぎた頃から猛烈な睡魔が襲ってきた。とても瞼を開けていられる状態ではない。睡魔に負けてしまった神人は、椅子に座ったまま眠ってしまった。

「神人、神人」

深い深い眠りの中にいる神人を誰かが呼んでいる。神人はもつと眠りを貪っていたが、声の主は眠ることを許してくれそうもない。ぶつぶつ文句を言いながら目を開けた神人は、目の前に立っている声の主を見て驚いた。

「父さん、助かったんだね！ このまま死ぬんじゃないかと思って、とっても心配してたんだよ。先生を呼んでくるから待ってて。一緒に帰ろう！」

「神人、私はもう行かなくてはならないんだ。お前に別れを言いに来たんだ。母さんのことを頼んだぞ。それからもうひとつ、私が行ったらお前にいろいろな変化が起きるけど、自信を持って正義のために生きなさい。悩んだ時は私を呼びなさい。いつでもお前のそばに居るから・・・」

「父さん、なに訳の分からないこと言ってるんだ。母さんが待ってるから早く帰ろうよ」

神人の言うことに答えず、神彦はゆっくりと頷いた。その目は、これでお別れだ。母さんを頼んだぞ。と言っている。神彦の全身が金色に輝き始め、少しずつ離れ始めた。神人は駆け寄り腕を掴もうと

するが、すり抜けて掴めない。

「ウソだろ、父さん。行くな。行かないでよ！　お願いだから戻ってきてよ。　父さん、父さん、父さああああん」

肩を揺すられ神人は目を覚ました。顔を上げてみると、心配そうに覗き込んでる看護婦さんの顔があつた。

「随分うなされてましたけど、大丈夫ですか？　付き添い用のベッドがありますから、横になられたほうがいいんじゃないですか？」

「看護婦さん、父さんが何処かへ行ってしまったんですけど・・・」
今では看護師と呼ぶが、神人は看護婦さんのほうが言いやすいので看護婦さんと呼んでいる。神人は寝惚けていた。夢で見た光景を現実と勘違いしていた。

「お父さんはベッドで寝てますよ。ほら」

看護婦の視線の先、神人の目の前のベッドに神彦は寝ている。神人は神彦の姿を見ても信じられなかった。夢が余りにリアルだったからだ。生死の境を彷徨っている父親を見て気が動転してるのだろうと思った看護婦が、安心させるように優しく言った。

「私たちがついてるから大丈夫ですよ。少し休んでください。心配はいりませんから」

「すみません。じゃあ僕少し寝ますから、父のことよろしくお願いします」

付き添い用の簡易ベッドに横になった神人は、すぐに寝息を立て始めた。神人が深い眠りについたと同時に、またしても神彦が現れた。今度は神彦は何も言わずに黙っている。いくら呼びかけても優しい笑みを返すだけだ。まるで、今の時間を満喫しようとしているように見える。

その時だ。神彦の姿が急に薄れ始めた。旅立つ時が来たように、神彦は手を振っている。声は聞こえないが唇の動きから、「母さんを頼む。自分を信じて進みなさい」と言っている。

神彦の姿が段々と透け始め、まるで透明人間になっていくかのよう
に神人の視界から消え始めた。「父さん、行かないで！」神人は
必至で叫んだが声にならない。やがて神彦の姿は完全に消え、その
瞬間、神人は目が覚めた。

目が覚めた神人の耳に飛び込んできたのは、誰かが走っている足音だ。足音からして慌てている様子が分かる。その足音は神人の部屋に飛び込んできた。

何事が起きたのかと半分寝ぼけている神人は、AEDを持っていく医者と看護婦を見て状況が把握できた。AEDとは自動体外式除細動器のことで、心臓が停止した時に電気ショックを与えて心臓を蘇生させる医療機器だ。

看護婦が神彦の胸にAEDをセットし、スイッチを入れた。充電した後、電気ショックを与えた。神人は祈りながらその様子を見守るしかない。今は神彦が生き返るように祈ることしか出来ない。

神人は必死に祈ったが、それは神様に届かなかった。医者の額にはうつすらと汗が滲んでいる。看護婦三人も同じだ。ベッドに寝ている神彦を見ていると、眠っているように見える。朝になったら目を覚ましそうな気がする。

神彦が死んだということが信じられない神人は、医者と看護婦が出て行ったあともじつと神彦を見つめ続けていた。神彦が死んでから五分ほどが経った時だ。突然、神人の脳裏に強烈な光が現れた。その光は神人の脳全てを覆いつくすほどの大きさで、金色がかった白色というか、神々しいとしか言えない色に輝いている。

余りにも強烈な光に立っていられない。目まいがするような感覚だ。神人はゆっくりと簡易ベッドに横になった。目を開けると、光で目をやられそうな気がして開けることが出来ない。

その光は感覚的に一分ぐらいで消えてしまった。今の光はなんだろうか？ 疲れてるのか？ 神人は答えが出ないことは分かっていた。簡易ベッドから起き上がって神彦を見てみると、何かを成し遂げたよ

うな、自分の使命は終わったような安らかな表情をしている。気のせいか、さっきとは表情が変わったような気がする。

神人は神彦の表情が変わったのもそうだが、自分自身も何かが変わったような気がしていた。その何かは言えないが、何か感覚的というか、精神的というか、とにかく何かが変わったのは間違いない。しばらくして主治医から神人に説明があつた。神彦が亡くなったのは午前二時三十五分。脳にも損傷を負っていたが、直接の死因は内臓破裂による出血多量が原因だった。神人は神彦が亡くなったにも関わらず、なぜか神彦が近くにいるような気がしていた。

父親の神彦が亡くなった翌日から、神人は同じような不思議な夢を毎日見るようになった。その夢は、大きな金色の光が現れ神人を包み込んでしまうのだ。神人は光の中にいるのだが眩しくない。そこは地球上の世界ではなく、想像もつかない別世界、まるで宇宙空間のように思える。

そこに自分が居るのが見える。その自分はサラリーマンの自分とは明らかに違う。現実の自分はポツチャリ体型で運動音痴なのだが、光の中の自分は精悍な顔つきで、ずば抜けた運動神経の持ち主なのだ。

それに加えてSF映画で見たような超能力が使える。念力、瞬間移動、テレポート、冷凍現象まで起こしてしまうのだ。神人は夢を見ながら夢の中で、ヒーロー崇拜的な自分の性格が、こんな夢を見せているのだと思っていた。

その夢は一週間も続いた。八日目の朝、いつものように顔を洗って鏡を見た神人は、ポツチャリ顔の頬の贅肉が減り、シャープなルックスになっていることに驚いた。体重を計てみると、九十キロだったのが八十キロに減っている。

「ダイエットしたわけでもないのに、一体どうしたんだろう？」

その後も体重は減りつづけ、贅肉でメタボそのものだった体型は、プロボクサーのような引き締まった筋肉質の身体へと変貌を遂げていった。一週間後に再び体重計に乗った神人は驚いた。なんと六十五キロまで減っていたのだ。何もしてないのに二週間で二十五キロも減量したのだ。

顔つきは野生的で精悍になったが、ポツチャリ顔のときの面影は残っている。会社では神人のあまりの変わりように、整形手術したという噂も立っていた。ダイエットで苦しんでいる女性や中年太り

のオヤジ連中からは、ダイエットのやり方を教えてくれと連日言われていたが、本人にもなぜ体重が減ったのかが分からない。顔つきまで変わったのには、他人どころか自分が一番驚いていた。

今思えば父親の神彦は、今の神人と同じ体型、同じ顔つきをしていた。母親の京子は神彦が亡くなってから、

「神人、最近あなた、段々とお父さんに似てきたわね」

と、口癖のように言っている。そう言われれば、自分でも父親に似てきたと思う。父親は神人と違って運動神経が良く、スポーツは何でも出来た。神人が運動が出来なくて落ち込んでいると、

「心配しなくても、そのうちお前は誰よりもスポーツが出来るようになる。今はまだその時期じゃないんだ」と、慰めには程遠いことを言っていた。

徒競走でビリだったとき、跳び箱が飛べなかったとき、逆上がりが出来なかったときなど決まって口にする言葉だった。神人は、「人の気も知らないで適当なことを言わないで！」と、食って掛かったこともあった。

「もしかしたら父さんの言っていた時期というのは、今かも知れないぞ」

ふと神彦の言っていたことを思い出した神人は、早速ジャージに着替えると外へと飛び出した。運動音痴の神人は、未だかつて自らジョギングをしたこともなければ、外でスポーツをしたことはなかった。

運動といえば学校の授業以外ではやる気もなければ、やりたいと思ったこともない。スキー、スケート、ゴルフ、ボーリングもダメ、バッテイングセンターでさえ行く気がしない。強いて言うならスポーツとは言えないが、やるのはビリヤードぐらいだ。

その神人が生まれて初めて、自分から走ってみようという気になったのだ。今日の神人は身体を動かさずにはいられなかった。何か

が違う。明らかに違う。それを確かめたかった。一秒でも早く確かめたかった。

ゆっくりとジョギングしながら、近くにある緑地公園まで走った。公園に着いた神人は周りを見回した。夜九時の公園に人影はない。大きく深呼吸をした神人は全力でダッシュした。

「風になった！」

そんな感じだった。とにかく身体が軽いのだ。万年ビリの徒競走のときと比べると、異次元の感覚に思える。神人はストップウォッチを持ってきていた。だいたいの感覚で百メートルのところに目印を付けると、再び全力でダッシュした。今度はスタートと同時に、ストップウォッチのスタートボタンを押した。

目印を付けた百メートルのところでストップボタンを押した。かかった時間を見たとき、神人はストップウォッチが故障していると思った。なぜなら四秒と表示されていたからだ。百メートルを四秒と言えば、動物のなかで俊足を誇るチーターに匹敵する早さだ。

次に神人は、静止した状態で力いっぱいジャンプしてみた。いわゆる垂直飛びだ。一メートルほどは跳べるのではないかという気がしていたが、その結果に自分自身が仰天した。目測ながら五メートルは飛んだのだ。

「もしかしたら、さっきの四秒も本当の数字か！」

神人はそれを確かめるべく全力で走った。凄まじい早さだ。時速百キロを超えているのは間違いない。頭の中で数えた数字は四秒に到達する手前だった。

「一体俺の身体はどうなったんだ？」

神人は誰も質問に答えてくれないのは分かっていたが、今の状況においては自問するしかなかった。まさかその質問に答えてくれる人がいたとは。否、正確に言えばそれは人ではない。人を超越した人。桁違いの能力を持った人。神だ。神が神人の質問に答えてくれ

た。

「神人よ。我が愛する息子よ。私はそなたの神宇宙に住んでいるものだ。人間世界では、私のことを神と呼んでいる。神人よ。今から私が言うことを心して聞くが良い。そして私の教えを守り、正義のためにその力を使うのだ」

突然頭の中に聞こえてきた声に、神人はキョロキョロと回りを見回した。これほど鮮明な声であれば、周囲五メートル以内に声の主がいるはずだが、神人の考えは期待はずれだった。

声の主の神は、そんな神人の考えなど無視するかのように話し始めた。話すというより、神の言いたいことがそのまま神人の脳裏に現れるのだ。例えるなら、膨大な量のデータが、数秒の間に脳に刻み込まれるようなものだ。

通常であれば、人間の脳では処理しきれないほどの膨大な量の情報だが、不思議と神人は理解することが出来た。その内容を噛み砕いて言えば、神は次のようなことを伝えた。

神の住む所、神の住む空間を神空間じんくうかん、または神宇宙じんうちゅうという。神宇宙は満天の星が輝く広大な宇宙にもある。地球上にもある。そして人の中にもある。

神の住む神宇宙とは目に見える宇宙だけではなく、意識の中にある宇宙でもあるのだ。分かりやすく言うなら、意識の中の宇宙は小宇宙だ。小宇宙の中に、神の住む神宇宙がある。神は人の中にも住んでいるのだ。

神彦の中の小宇宙、即ち、神宇宙に神は住んでいた。だが全ての人間に神宇宙があるかというそうではない。神宇宙という特殊な世界を持っている人間は全世界六十八億人の中で、おそらく神彦以外に二人、ないしは三人だろう。その中の一人が神人だ。

天乃家は代々、男一人しか生まれない。そしてその男の子には必ず神宇宙が受け継がれる。生まれながらにして神を受け継ぐ家系なのだ。神が宿る人間なのだ。それは天乃家に受け継がれる血筋ではなく、神の意思でそうなっているのだ。

その神が宿る人が死ぬと、神は息子の神宇宙に移り住むことになる。神の引越した。それまでは息子は神のことも神宇宙のことも知らないし、そのことについて親から聞かされることもない。このことを話すのは禁止されており、神が移ったときに神自身が知らせてくれる。言わば門外不出、他言無用の一子相伝の神秘の世界、掟なのだ。

そして神が宿った人間は、神が持つ力を使えるようになる。神と同じと考えれば分かりやすいだろう。いわゆる超人になるのだ。それと同時に様々な問題を引き付けるようになる。問題は、それを解決出来る者のところへやってくるのだ。それは持つて生まれた宿命であり、逃げることも変えることも出来ない。

超人となるのが幸か不幸かは分からない。ただ言えるのは、天乃家は神に選ばれた神の住む特別な家系なのだ。

神の言葉を直接聞いた神人は、頭が混乱していた。神がウソをつく訳はないが、今まで父親から何も聞いていなかったことを突然明かされたのだ。その内容は衝撃的なものだ。信じろと言われても、はい分かりましたとは言い難い。

だが相手は神だ。それに加え、神は先祖代々から天乃家の神宇宙に住んでいるのだ。今話し掛けてきているのは本当に神なのか？神の名を借りた良からぬ者ではないのか？神人の考えていることは、神宇宙の神はすべてお見通しだった。

「神人よ。疑問を持つ必要はない。私の力はすでにそなたに与えてある。身体能力が劇的に変わってるが、人間世界でいうところの超能力も与えた。そなたは私の分身となったのだ。自分で確かめるが

良い。ただし、その能力を私利私欲に使ったら、神罰が下ると心しておくが良い」

神宇宙の神からの大量の情報は、一瞬にして神人に与えられた。常識的に考えると、天乃家代々の情報を全て伝えようと思えば何日もかかるのだが、神はそれを数秒で神人の意識に伝えてしまった。神人もまたそれをすべて理解することが出来た。不思議としか言いようがない。

「神様、超能力も与えたと言われましたけど、どうやって使えるのですか？」

「神人よ。考える必要はない。イメージすれば良い。イメージするだけで超能力は発揮される」

「どんな超能力が使えるのですか？」

「人間が持つていない能力を超能力と呼べば、あらゆる能力と言える。超能力という言い方のほかに、魔法と言ったほうが分かりやすいだろう。イメージすれば実際にそれが起きる」

神人は神の言葉を信じ、帰宅すると早速超能力を試してみることにした。神の言われたようにイメージしてみることにした。テーブルの上に置いてあるコーヒークップが、空中に浮くことをイメージしたが何も起きない。

ボールペンやリモコンなど、置いてあるものを動かそうとイメージしたが、やはり何も起きない。三十分ほどやってみたが、ティッシューパー一枚すら動かすことが出来ない。

「俺には無理か。神様が言ったことはウソなのか？　そもそも俺が神様を引き継ぐこと自体が変だよな。他にも優秀な人がいるのに。あああ、やあめた」

神人は独り言を呟きソファーに寝転んだ。寝転んでいるうちにウトウトし始め眠りに入ろうとしたとき、意識の中に神が現れた。

「神人よ。考えるのとイメージするのとは違う。そなたは考えてい

るだけでイメージすることが出来ていない。コツを掴めば簡単だ。そなたを頼っているいろいろなトラブルがやってくるだろうが、超能力が使えなくては、自分自身の命が危なくなることもある。使えるようになるまで練習することだ」

神が消えたのと同時に神人は目を覚ました。

「冗談じゃない！ 超能力が使えないと命が危なくなるなんて。神様も勝手だなあ。父さんは文句も言わないで引き受けたのかなあ」
独り言を呟きながら無意識にテーブルに視線を移した神人は、テイスシュペーパーが宙に浮いているところを思い浮かべた。思い浮かべたと言うよりイメージしたという感覚だ。その瞬間信じられないことに、イメージしたのと同じことが起きたのだ。

「そうか！ 神様が言ってたのはこういうことだったのか」

なかなかイメージするという感じがつかめない神人に、神がイメージすることを教えてくれたのだ。一度その感覚を覚えてしまうとあとは簡単だった。神人は部屋中のものを浮かべたり動かしたり、瞬間移動させたりしてみた。自分でやっていながら、それは信じられない光景だった。

イメージするという感覚を覚えた神人は、しばらく練習しているうちに、それを意識することなく超能力を使えるようになっていた。超能力は神の言ったとおりだった。ケーキをイメージすればケーキが目の前に現れた。超能力というより魔法だ。

神人には超能力でも魔法でも呼び方はどうでも良かった。神の使う能力を授かったのだ。神等力しんとうりきだ！ 神人はふとその言葉が浮かんだ。神通力とは仏教で使う言葉だが、神人が授かったのは神通力ではない。神と等しい力、言うなれば神等力。今の自分の能力にピッタリの呼び名だと思った

神等力の使い方をマスターした神人は興奮していた。SF映画の世界だと思っていたことが、現実に存在することが信じられない。

しかも自分がその当事者なのだが、神人にひとつの疑問が湧いた。

「神様、どうして神様が自分でトラブルを解決されないんですか？
わざわざ僕に神等力を与えなくても、神様がその力を使えば済む
ことではないのですか？」

「神人よ。私の力を人間界で使うことはできない。それが決まりなの
だ。だからそなたに私の力を与えたのだ。言うなれば私は、そな
たのパワーの源なのだ。それが神宇宙に住む私の使命なのだ」

神の力を使えるようになった神人に、その力を頼ってトラブルが
寄ってくる。それが神を受け継ぐ家系の宿命なのだ。その宿命から
逃げることも避けることもできない。遭遇したトラブルを解決する
ことが、神人に与えられた使命なのだ。

力を与えられた翌日の土曜日、神人は母親の京子と一緒に伊豆を目指してクルマを走らせていた。親孝行する前に父親が逝ってしまった、後悔の念にさいなまれていた神人は、浅はかな考えとは思いつつも京子を旅行に誘ったのだ。

当然のことながら京子は驚いた。父親が死んだばかりだというのは旅行に行こうと誘われたからだ。だが神人は真剣だった。今旅行に行くことが良いのか悪いのかは別にして、旅行を思いついたこと事体が、父親からの頼み事のような気がしたからだ。

神人のクルマはトヨタのプリウスだ。土曜日だが、東名高速を走っている長距離便のトラックは多い。走行車線を法定速度で走っているクルマもあれば、時速百二十キロ以上出てるのではないかと思えるスピードのクルマもある。神人は時間に追われているわけでもないし、事故でも起こしたら大変ことになるので、安全運転で走行車線を走っていた。

ふとバックミラーに目をやった神人は、それに映った一台のトラックが、あつと言う間にプリウスの真後ろに迫ったのに驚いた。トラックはプリウスにぶつかる寸前に、急に追い越し車線に進路を変えた。追い越し車線を走っていたセダンが慌ててブレーキをかけ、あわや接触事故を免れた。

そのトラックは追い越し車線と走行車線を我が物顔で、方向指示器も出さずに進路変更しながら走っている。危険極まりない運転だ。一歩間違えば接触事故を起こし、大惨事になりかねない。

神人はそのまま安全運転で走行車線を走っていたが、トラックが走っている追い越し車線が詰まっていた。その原因は、一台の軽自動車が低速で走っていたからだ。

トラックのドライバーはイライラし始め、前のクルマを煽るよう

に左右に車体を揺らせ始めた。ジグザグ運転みたいな感じだ。その横を神人のプリウスが通り過ぎようとした時、トラックは方向指示器をつけずに急に割り込んできた。

「あぶない！」

助手席の京子が大声を上げた。急ブレーキを掛けたら事故になるのは間違いない。咄嗟にそう判断した神人は、クラクションを押し続けた。トラックはクラクションの音に驚き追い越し車線に戻ったが、それから神人に災難が降りかかって来る事になる。それは超能力を授かったことによる、トラブルを引き寄せる宿命の始まりだった。

追い越し車線の軽自動車は相変わらず低速で走っている。運転しているのは中年のおばさんだ。まったく後ろを見ていなくて、自分が迷惑かけているということを分かっていない。

プリウスの横を走っていたトラックが消えた。神人はそう思ったが、トラックはプリウスの真後ろにいた。車間距離は二メートルほどしかない。煽るように右に左に車体を揺らしている。神人は、前を走っているワンボックスの前に出るために加速した。

追い越し車線に出るとワンボックスとの距離を見て、その前に出た。これでトラックとプリウスの間にワンボックスが入った形になった。ところがトラックは強引な車線変更を繰り返して、無理やりプリウスの前に割って入ると、ブレーキをかけたリジグザグ運転をしたりと神人に嫌がらせを始めた。神人が鳴らしたクラクションに腹を立てたのだ。

「神人。トラックを先に行かせましょう。事故でも起こしたら大変よ」

「そうだね。ああいうバカには関わらないほうがいいね」

神人は速度を落としてトラックとの距離を空けることにしたが、トラックも速度を落としてプリウスから離れようとしないう。神人は追い越し車線に出ると、百四十キロまで一気に加速した。トラックとの距離も一気に離れた。

そのままの距離を保って走っていると、パーキングエリアまで二キロメートルの標識が見えた。トイレと自動販売機だけの単なるパーキングだ。神人はそのパーキングに入ることにした。走行車線に入ると、しばらく走ってパーキングに進路を変えた。

あるうことか、さっきのトラックもパーキングに入ってきたのだ。バックミラーでトラックを確認した神人は、戦いは避けられないと感じた。神人はプリウスをトイレに近い位置に駐車した。京子はクルマから降りるとトイレへと歩いていった。

トラックはプリウスから十メートルほど離れたところに停車した。降りてきたのは二人の男だ。ニツカポツカのズボンにランニングシャツという格好だ。二人とも百八十センチを超えていて、ボディビルで鍛えているのか、がっしりとした筋肉粒々の体格だ。

短髪で強面のサングラスを掛けた姿は相手に恐怖を与えると同時に、戦闘意欲もなくさせる迫力だ。おそらく今までにも幾度となく多くの市民に迷惑をかけてきたと思える。今まさに神人は彼らの標的になっていた。

彼らはゆっくりと神人に近づいてきた。その距離が二メートルほどになったとき、一人の男が脅すように言った。

「おんどれ、よくもワシらの邪魔をしてくれたな！ 今更謝って済むと思うな。腕の一本も折られる覚悟はあるんやろうな！」

男たちは小柄な神人が震えながら許しを請う姿を想像していたが、期待は見事に裏切られた。許しを請うどころか、神人は男たちの視線を真っ向から受け、平然と立っている。脅しがまったく効かないのだ。それどころか神人の目に宿る光を見た途端、男たちは触れて

はならないものに触れてしまったことを後悔した。

たかだか、身長百七十センチほどの神人が全身から発する圧倒的な迫力は、男たちの目に神人の姿を、巨大熊ほどの大きさに感じさせていた。トイレと自動販売機しかない駐車場には、男たちには不運なことにクルマは十台ぐらいしか停まっておらず、トイレに行っているのか人影は全くない。

否、人影がないと言うのは正しくない。人影がいなくなるように神人が神等力を放っていたのだ。神人は不敵な笑みを浮かべた。男たちはその笑みを見て全身にとてつもない恐怖が走ったが、あとに引けないことも悟った。

二人とも手には鉄パイプを持っている。恐怖を打ち消すために、二人同時に鉄パイプを振りかざして神人に襲い掛かった。男たちは動こうとしない神人が、血まみれになって倒れるところを脳裏に描いた。

二人が振り下ろした鉄パイプは、神人に命中しているはずだった。この至近距離からでは、格闘技の達人でもボクシングの世界チャンピオンでも、避けることは絶対に不可能だ。だが鉄パイプが叩いたのは神人ではなかった。硬いアスファルトの地面だ。神人はどうやったのか、さっきの位置から一メートルほど横に立っているのだ。

男たちは再び襲いかかったが、またしてもアスファルトを叩いた。何度やっても結果は同じだ。神人は薄笑いを浮かべたまま、何事もなかったかのように立っている。肩で息をしながら、鉄パイプを振り上げる力もなくなってきた男たちに神人が言った。

「今からお前たちを、この世から消し去る。俺に喧嘩を吹っかけたことを後悔するんだな！」

神人はゆっくりと右手を開いて、男たちの正面に突き出した。何

が起きるのか分からないが、本能的に身の危険を感じた男たちは逃げようとしたが、足が動かない。金縛りにあつたようでビクともしないのだ。

さっきの威勢はどうなったのか。その身体の大きさに似合わないほど小さく見える二人の顔は、母親に叱られている幼稚園児のような表情に見える。二人は更に凄まじい恐怖を体験する。神人の開いた右手に、長さ一メートルほどの日本刀が現れたのだ。それは魔法としか言いようがなかった。

「お前たちを、この魔殺剣で切る！」

「まっさつけん・・・」

暗示にかかったかのように男たちが洩らした声は、弱弱しくて震えている。不気味な光を放つ魔殺剣を持った神人は、動けないでいる男たちに詰め寄ると、気合もろとも男たちの頭を目がけて、凄まじい速さで魔殺剣を水平に振った。魔殺剣は男たちの頭を一刀両断にした。

余りの速さに、切断された頭部は転げ落ちない。速すぎたために一滴の血も出ずに、頭もそのまま残っている。もし傍で今の光景を見ているものがいたら、そう思ったに違いない。間違いなく魔殺剣は、男たちの頭部を一刀両断にしたのだ。二人の男の頭部は転げ落ちるところか、二人は全身の力が抜けたかのようにヘナヘナとその場に崩れ落ちてしまった。二人とも失禁している。

「消魔！」

神人は何かを確認するかのように意味不明の言葉を吐いた。男たちの頭部は切れていない。神人が切ったのは、男たちの頭の中に巣食う、魔虫だったのだ。魔虫が切られた瞬間、男たちは普通のまともな若者に戻った。もちろん今までのことは全て記憶にあるのだが、なぜ自分たちが危険な運転をしたのか、なぜ神人に襲い掛かったの

かは、いくら考えても分からない。魔虫に巢食されると、人は犯罪を犯すようになる。

「お前たち、これからはその体力を人様のために使え。分かったな」神人の諭すような優しい言葉に二人は大きく頷きながら、ハイ！と返事を返した。神人と男たちとの戦いは終わった。どういふわけか人一人いなかった駐車場に、それぞれのクルマに乗っていた人たちが何処からともなく現れた。それは神人が、自分たちの周りに誰をも寄せ付けないバリヤーを張っていたのを解いたから、人々が寄ってきたのだった。

駐車場から高速道路の本線に戻った神人は、さっきの戦いを思い出し身震いするほどの興奮を覚えた。それは戦いそのものではなく、自分の神等力に興奮したのだった。実践で初めて使った神等力は予想以上の力だ。神の力は想像を絶する効果を発揮した。

男たちの頭の中に巢食う魔虫が見えた。医療機器のCTやMRIを使っても、それを見ることは出来ない。なぜなら、頭の中と言っても意識の中にいるからだ。魔虫というのも、神宇宙に住む神から教えてもらったものだ。

魔虫と言っても虫ではない。人々の怨み辛みや嫉妬、怨恨、憎悪、邪悪な心などの感情が固まった、言わば人の心を悪に導く負のエネルギーの塊だ。人々が発する負の感情は常にいろいろな所を漂っている。それが意識に取り込まれると人は凶暴になり、いろいろな犯罪を犯すことになる。今回のトラック運転手も魔虫が意識に入り込んだ結果だった。

順調に東名高速を走ったプリウスは、予約している伊豆の旅館に午後四時に到着した。高台の竹林にある純和風の旅館だ。二人は夕食までに温泉を楽しむつもりだ。夕食は七時に頼んであるので、温泉を楽しむ時間はたっぷりある。

考えてみれば、父親も含めて親子で旅行に行っただのは小学校の頃だ。それ以降はない。両親だけで出かけたこともない。言ってみれば、今回の旅行が親子で行く初めての旅行みたいなものだ。

普段の雑踏の世界から離れ、ゆったりとした時間に身を任せながら露天風呂を楽しむ京子には、ここはまるで別世界のように思える。完璧な癒し空間だ。早めに入ったせいで京子以外の客はいない。

神人が大浴場に入っていくと先客が二人いた。一人は四十歳ぐらい、もう一人は七十歳前後に見える。顔が似ているから親子だろう。二人は神人の身体を見て驚きの表情に変わった。

どういう鍛え方をすればそこまでの肉体になるのか？ そんな視線を浴びせている。身長百七十センチ、体重六十五キロ。まったく無駄な脂肪や筋肉はないが、逆三角形の見事な肉体は凄まじい戦闘能力を秘めているように見える。

ゆったりと至極のひとときを過ごして部屋に戻った二人は、風呂上りに冷たいビールを胃袋に流し込んだ。大げさな言い方をするなら、生きてて良かった！ と思えるほどの美味しさだ。

「母さん、肩でも揉んであげよ」

「お願いするわね。でも急にどうしたの？ 旅行に連れて行くといつたり、肩でも揉むと言ったり・・・」

「父さんに何も親孝行してなかったから、その分、母さんに孝行しようと思っただけ」

神人は父親が逝くとき、「母さんのことを頼む」と、何度も意識に語りかけてきたのを覚えていた。それが親孝行をしろと言ってるのかどうかは別として、両親に何もしていないことを思い出し、今回、旅行に誘ったのだった。

神人は肩を揉みながら神等力の気を注いだ。神等力が身に付いた今、イメージするだけで何でもできる。神人は母親の肩の凝りや腰の痛みなど、悪いところが全て治るように気を注いだ。

「神人、マッサージが上手だね。身体が新品になったような感じだよ。肩こりも取れたし、腰の痛みもヒザの痛みもなくなったよ。どうやったの？」

京子は、神彦と神人が神の力を受け継いでいるとは知らない。神等力をもつてすれば病気を治すことぐらい簡単だ。そうかといって病氣治療だけに専念して心霊治療的なことを始めると、神人を頼ってくるトラブルに対応できない。だから治療は余程のことがない限りやるつもりはない。

神人を頼ってくるトラブルとは、そのトラブルを持つてくる当人の潜在意識が、「助けてくれ！」と、SOSを出している状態だ。顕在意識は魔虫の影響で暴力的になっているとしても、本来その人の真の姿である潜在意識が良心的であれば、その人は神人にトラブルを持つて頼ってくる。トラブルで神人を苦しめようとするのではなく、このトラブルから救って欲しいという願いを込めて。

魔虫を退治したトラック運転手もそうだった。魔虫がいなくなった彼らは、心優しい青年に戻った。その姿こそが、潜在意識に刻まれている彼ら本来の姿なのだ。

人の潜在意識は神の意識に通じている。言うなれば、潜在意識からの救いを求める叫び声を神が聞き、神が彼らを神人に引き寄せるのだ。神が直接彼らを救えるのであれば救うのだが、それが出来ないからこそ、神等力を天乃家の男子に与え、神の代わりをさせている

のだ。

顕在意識でいくら神頼みをしても神には届かない。潜在意識の声のみが届くのだ。顕在意識にはいろいろな欲望が混じっている。お金持ちになりたい、出世したい、憎きアイツを殺したい、可愛いA子ちゃんを抱きたいなどと。初詣の神頼みは顕在意識からの頼みだからそれが叶えられることはない。いくらお賽銭に大金を払っても。

人間の欲望には限りがない。だからこそ神は、顕在意識との繋がりを絶たれたのだ。逆に潜在意識には欲望がない。あるのは慈悲、思いやり、感謝、前向きな心など、限りなく神に近い姿があるのだ。もちろん邪悪な潜在意識を持っている人間もいる。

神人は自らの神宇宙に住む神に、それらのことを教えてもらった。だからトラック運転手を殺すことなく、彼らの潜在意識からの救いの声に対応して彼らを救ったのだ。

旅館の夕食は伊豆だけあって海の幸満載の豪華な料理だ。神人も京子も魚料理には目がない。特に刺身は大好物で、毎日刺身でもOKだ。そういうこともあって、天乃家では食卓に刺身が並ぶことが多い。この日の夕食は二人にとって、贅沢極まりない至高の料理に思える。

「神人、こんな美味しい料理を食べたらいつ死んでもいいよ。今日は本当にありがとう。孝行息子を持って、きつと父さんも喜んでくれるよ」

京子は目頭を押さえながら言った。

「死んだら食べられなくなるじゃないか。今度は海外旅行に連れてってやるからね。父さんの分まで長生きしてもらわないと困るよ」

他愛のない親子の会話を楽しみながら、豪華な料理を堪能している二人は、こんな時間が永久に続くと思っていた。それはごくごく普通の想いだ。特殊な世界に居ない限り誰もが思うことだが、神人

にそれは許されない。

母親と二人だけの家族旅行を終えて帰宅した神人は、近場とは言え初めての親孝行に満足だった。考えてみれば何が親孝行なのか分からないが、母が喜んでくれたので良しとした。

神等力を得た神人は、対応をテストされているのではないかと思える場面に、またしても遭遇することになった。その場面とは電車の中だ。

いつもの時間に仕事を終えた神人は、同僚と雑談をしていて会社を出るのが遅くなった。会社を出たのは夜の十時過ぎだ。帰りの電車はこの時間だと空いている。出発まで二十分ある。神人は横長のベンチシートの端の席に座った。

こんな時間に帰宅する人は残業？ あるいはデート？ あるいは飲み会？ などと、どうでもいいことに考えを巡らせながら、バッグから週刊誌を取り出すと読み始めた。

出発五分前になると空席はなくなった。立っている客も増えてきたが、混雑というほどではない。時間が時間だけに子供の姿は見えない。酔って饒舌になっている客もいる。メールをしているのかインターネットを見ているのか、携帯電話を見ている乗客が多い。

そんないつもの光景に、特に何を思うこともなく週刊誌を読んでいた神人の耳に、不愉快な声が飛び込んできた。声の主は二人の男だ。周りの乗客の迷惑も考えずに、大声で卑猥なことや不愉快なことを喋っている。その口調から酒に酔っているのが分かる。

神人は週刊誌から二人の男に視線を移した。彼らは車両の中央の吊り革に？まって話している。神人からは彼らの右斜め後ろの姿が見える。二人とも身長は百八十センチを越えていて、ガッシリした体つきだ。二人とも両手に空手ダコがあり、Ｔシャツからのぞくタトゥーの入った太い腕が暴力的に感じられる。電車が出発してすぐに、年上の男が目の前席を見回しながら言った。

「今日は疲れたよなあ。座りたいけど、誰か席を譲ってくれる親切な人はいないかなあ」

五十歳代と思える男性と大学生と思える若者が席を立つと、隣の車両へと移っていった。彼ら二人の隣に座っているのは、老人と二十代と思われるＯＬだ。

「すみませんねえ」

男は感情のこもっていない口先だけの礼を言うと、二人が去った席に座った。隣のＯＬも席を立つとすると、右手で肩を押して座らせた。

「あんたは行かなくてもいいよ。さっきの親切な人が席を譲ってくれたからな。お前も座れ」

男は相棒に声をかけた。二人の男はＯＬの両サイドに座った。年上の男はＯＬの肩に腕を回すと、女性が嫌がるのも無視して抱き寄せた。女性は恐怖のあまり声が出ない。乗客の誰も見えて見ぬふりを決め込んでいる。中には寝たふりをしている客もいる。

神人はゆっくり立ち上がると男たちの前に行った。

「さっきから見ていると、あんたたちのやっていることは犯罪ですよ。この女性が嫌がっているのが分からないんですか」

二人の男は同時に立ち上がった。神人よりも十センチ以上は背が高く、横幅もある。乗客の誰もが、今から神人の身に降りかかるであろう場面を思い浮かべ、顔色を失っている。中には足早に別の車両へと移る客もいた。

年上の男は木村、もう一人の男は須藤だ。神人は彼らの頭の中を読むことが出来る。俗に言うテレパシーだ。男たちは完全に神人をなめ切っている。次の駅で引きずりおろして痛めつけるつもりだ。二人とも実践空手の経験者で、暴力団ではないがワル、いわゆるチンピラだ。

「兄さん、いい度胸をしてるな。気に入った。次の駅で降りてもら

うぞ。逃げるなよ」

女性は男たちが立ち上がった隙に神人に頭を下げ、別の車両へと移って行った。他の乗客たちは男と神人に関わりあいにならないように、我知らぬといった表情で素知らぬ態度を取っている。

「分かりました。次の駅で話し合いますよう」

神人はそう言くと男たちの視線を真つ向から受け止めた。男たちには神人の瞳の奥に宿る不気味な光が見えた。今まで素人相手に負けたことのない二人だが、目の前の神人に喧嘩を売ったことを後悔していた。実力が違いすぎるのを感じ取ったのだ。

男たちの意識の中に魔虫が見えた。神人は彼らの潜在意識が自分に救いを求めてきたのを知った。次の駅で電車を降りた神人と木村、須藤の三人は改札口を出た。夜十一時に近い時間だと人影はほとんどない。

「お前たち、俺に喧嘩を売ったということは、それなりの覚悟は出てくるんだな。ただでは済まないと思えよ」

神人は相手に瞳の奥に潜む恐怖を見せることが出来る。と言っても、相手が自分と視線を合わせたときに、相手の意識に精神的な恐怖を書き込むだけで、実際に瞳の奥に恐怖があるわけではない。

木村と須藤は神人にとつもない恐怖を覚え、足がすくんだ。そんな二人の思いを知ってか知らずか神人がジャンプした。神人の信じられないジャンプ力に、二人は金縛りにあつたかのように身動きが出来ない。神人は二人の頭上を軽々と越え彼らの背後に下りると、すかさずローキックを太腿に叩き込んだ。手加減はしているが、二人はあまりの衝撃に足から崩れ落ちた。神人は一番衝撃に耐えられると思つた太腿を攻撃したのだ。

木村と須藤は実力の違いに後悔したが、神人の右手に握られている日本刀を目にして、その後悔は恐怖に変わった。殺されると思う意外に、彼らは何も思いつかない。日本刀は魔殺剣。いっどこからどうやって魔殺剣を出したのかを考える思考力も停止していた。

神人は情け容赦なく、気合もろとも魔殺剣を水平に振った。魔殺剣は二人の頭の真ん中を切った。普通に考えれば、二人の頭は真つ二つに切れて転がるはずだが、そうではなかった。

腰を抜かした二人は気を失う寸前だった。神人が切ったのは彼ら

の意識に巢食っていた魔虫だ。彼らの今までの悪事の数々は、魔虫が影響していたのだ。魔虫が消滅した途端、彼らは凶悪な表情から穏やかな表情に変わった。

神等力が身に付いた神人に恐れるものは何もない。ひ弱な運動音痴のとき、正義感はすぐにポツキリと折れていたが、今はそれが折れることも揺らぐこともない。

「これで二件目か・・・」

ポツリと呟いた神人は、神が宿る前とはまるで別人だ。例えるなら、軟弱な若者が、いきなり格闘技の世界チャンピオンになったような変わりようだ。それは肉体的にも精神的にも劇的な変化だった。神人は周りに誰もいないのを確認すると、自宅へと瞬間移動してみた。いわゆるテレポートだ。あまりにあっけなく移動できた神人は、神等力の凄さに改めて驚いた。

翌日いつものように出社した神人に、同僚や先輩や上司など神人を見た社員がいつものように質問してきた。質問の内容は毎回全員同じだ。

「急に別人みたいになっちゃったけど、一体どうしたんだ？」

それに対して神人も全員に同じ答えを返した。

「僕が知りたいぐらいですよ。どこが悪いんですかね」

まさか口が裂けても神のことは言えないし、仮に言ったとしても誰も信じないだろう。普通に考えれば神宇宙という聞いたこともない場所に神が住んでいて、それが自分の子供に受け継がれるなんてSF的に考えても有り得ない。雑談が終わって席に着いた神人を課長が呼んだ。

「神人、急で申し訳ないけど、今週一週間、大阪に出張に行く

れ」

「分かりました。それで今回の出張は前回と同じ内容ですか？」

「同じだ。大阪営業所の営業マンのフォローをしてやってくれ。新製品の内容が良く分かんと言ってるから、営業というよりも製品説明だな」

「了解しました。新製品の開発には私も絡んでたので、分かりやすく説明してきます。ついでに営業マンに同行してお客様を廻ります」

「頼んだぞ」

翌日の午後十二時半に大阪営業所に着いた神人は、所内で弁当を食べている経理の大沢久美と森山可奈子のところに行った。他の社員は外へ昼食を食べに行つて、所内は彼女たち二人だけだ。

「こんにちは。これお土産です。皆さんで食べてください」

大沢と森山は、挨拶をし土産を渡した神人を、誰？ という目で見てゐる。数秒してから神人と分かった大沢が、ビックリしたような口調で言つた。

「もしかしたら神人君・・・、よね？」

「そうですよ。天乃神人ですよ」

「一瞬、誰かと思つたわ。半年前に来た時と別人ね。そんなに変わつちやつてどないしたの？ 整形でもしたの？」

大沢は神人が恥ずかしくなるくらいジロジロと見ている。その目は、神人が変わった理由を必至で探ろうとしている。

「僕にも分からないんですよ。体重は九十キロあつたんですけど、二週間で六十五キロになつたんです。まったく何もしてないんですけど・・・」

「二週間で二十五キロも減量したの？ ねえねえ、体重が減つた原因を探して、その方法を本に書いてたらベストセラーになるわよ」

大沢は本気とも冗談ともつかない口ぶりで言つた。森山は未だに神人本人に思えないらしく、頭から靴の先まで食い入るように見ている。二人にジロジロ見られている神人は、さすがに恥ずかしくなつてきた。

「勘弁してくださいよ。正真正銘の天乃神人ですから・・・」

大沢久美は二十八歳、森山可奈子は二十二歳。二人とも独身だ。前回来たときは、ただのデブには興味ないといった視線だったが、

以前の面影を残しつつ精悍な男らしいルックス、スタイルに変わった今、二人は恋愛対象といった視線を浴びせている。

二人の視線から逃げたいと思つてたところに、昼食を終えた所長と二人の部下が一緒に帰ってきた。打ち合わせ用の机に座っている神人の顔を見た三人は、お客様だと思い挨拶をした。

「こんにちは。いらつしやいませ」

「所長、僕ですよ。神人です。こんにちは」

所長と二人の部下は神人に声を掛けられ唖然とした表情になった。三人ともあんぐりと口を開け大きく目を見開き、これ以上の驚きの顔は出来ないといった表情になった。

「ほんまに神人啊！」

所長の口から出た言葉は、二人の部下が思っているのと同じ言葉だ。

「驚いたでしょう。なんといっても僕自身が驚いてるんですから・

」

「他人ごとのように何言うてるんや。一体どないしたんや？ 整形手術でもしたんか？」

所長の阿部信二は大沢と同じ質問をした。以前の神人を知っていると、この言葉しか思いつかない。神人も大沢たちに返したのと同じことを言った。

「僕にも分からないんです。体重は九十キロあったんですけど、二週間で六十五キロになったんです。まったく何もしてないんですけど・」

「どこか悪いわけやないんやろう？」

「はい。健康そのものです。以前デブのときは、コレステロール値や血圧なんかが高かったんですけど、今は全て正常です」

「そうか。痩せた原因が分かったら教えてくれ。俺も医者から体重を落とすように言われてるんで。ところで今日は製品説明をしてくれるんやな？」

「はい。一時から始めたいと思います。場所は会議室でいいんですね？」

神人は予定通り、一時から新しいソフトの製品説明と操作のやり方を教えた。営業マンは五人だ。途中、質疑応答などもあり、終わったのが定時の午後五時。それから親睦会という名目で、全員で夜の街へ繰り出すことになった。大沢、森山も含め九人だ。名目は何でも構わない。要するに皆、ただ飲みたいだけなのだ。

九人は梅田へと繰り出した。場所は所長お勤めの京風居酒屋だ。和風の料理に舌鼓を打ちながら親睦会は盛り上がった。話題はやはり神人の変身ぶりについてだ。神人の両サイドの席は大沢と森山が陣取った。神人にいろいろと聞きためた。

「神人君、正直に言いなさいよ。どうやったらそんなに劇的に変わるの？」

「大沢さん、だから何度も言ってるじゃないですか。僕にも全く訳が分からないんですよ。あるときから段々と体重が減り始めたんですよ。気がついたら、二週間で三十キロほど減ってたんです。最初は病気かと思つて病院に行つたんですけど健康そのもので、今の状態だと二百歳まで生きると言われたぐらいです。一体どうしたんでしょうね」

「俺が思うには神人はサナギから蝶になつたんやな。うんうん、そうやそうや。そういうことにしとこか」

「所長、上手いこといますね。多分それですよ。僕はサナギから蝶になつたんです」

話は盛り上がり、気がつくと午後十時半になっている。

「明日も仕事だし、このへんで開きにします。割り勘ですからよろしく願います」

一番若い坂本という営業マンが言った。会計を済ませ店を出た神人たち九人は、それぞれの自宅へと足を運んでいた。神人は予約し

であるビジネスホテルへと向かっていた。

「神人君、これからカラオケに行かへん？ ホテルに帰るだけで用事はないんでしょう？」

大沢久美と森山可奈子が神人を追いかけてきて言った。久美の言うように特に用事のない神人は、彼女らの誘いに乗ることにした。デブのときは社内の女性を誘っても断られていた。それが誘うどころか誘われたのだ。正直なところ、飛び上がるほど嬉しかった。

彼女らの案内でカラオケ店に入った神人は、神等力を得て歌も上手くなっていると思っていた。運動音痴の神人は歌も音痴だ。だから同僚にカラオケに誘われても、理由をつけて断っている。

カラオケ店に入ると手馴れた様子で、久美と可奈子が飲み物と簡単なツマミを注文した。その間、神人は何を歌おうかと考えていた。思えば運動音痴の神人はスポーツを避けていた。歌も音痴なのでカラオケに行くのも避けていた。だからと言って音楽が嫌いなわけではなく、CDも買うしFMラジオで音楽番組も聞いている。

神人が選曲に迷っていると、早速久美が歌い始めた。既に可奈子も次の曲を予約している。二人とも歌いこんでいるのか、さすがに上手い。神等力を得た神人は自信をもって歌い始めたが、その期待は見事に裏切られた。音痴は直ってなかった。考えてみればトラブル解決に音痴は関係ない。

アルコールのせいもあり、久美たち二人は神人の歌に盛り上がった。神人はヤケクソだとばかりに開き直って、カラオケを楽しんだ。音痴ながらも五曲を熱唱した神人は、二人からお世辞いっぱいの拍手をもらった。

三人がカラオケ店を出た時、時間は深夜零時を過ぎていた。この時間になると人通りは少なくなっている。人通りが少なく真夜中ともなれば、犯罪に巻き込まれる確率は高くなる。

神人たち三人が少し歩いたところで、アルコールのせいでハイテンションになっているのか、若者五人が騒いでいる場面に遭遇した。五人の男たちまでの距離は約五十メートル。神人は久美と可奈子の安全を考え二人に言った。

「まずいな。あいつ等に絡まるとイヤだから別の道にしよう」
「大丈夫よ。神人君がいるから全然恐いことあらへん。いざとなったら守ってくれるわよね？」

久美はアルコールのせいで気持ちが昂ぶっている。それに加え、精悍に変身した神人が居れば大丈夫だという女の直感がそう言わせた。久美と可奈子は神人の両脇に並んで腕を絡め、若者たちに向かって歩いた。両手に花状態だ。

神人たち三人に気づいた男たちが、ニヤニヤしながら、好色そうな暴力的な視線を送ってきた。五人とも二十歳代に見える。髪を染め、奇抜なヘアースタイルの男が二人と、若者にしては珍しいパンチパーマの男が一人、残りの二人は茶髪のロングヘアード。

全員、神人よりも背が高い。近づいてみると彼らが発散する暴力的な匂いに、久美は恐くなってきた。それは可奈子も同じで、その気持ちは自然と神人の腕に強くしがみつく行動となって表れた。久美は内心後悔していた。神人の言うとおり別の道にすればよかったと。

「いいねえいいねえ。ワシら男五人で色気がないのに、両手に花か。

ええなあ、兄ちゃん。ワシらも仲間に入れてくれや。お前らもそう思うやろ！」

リーダー格のパンチパーマの男の言葉に、他の連中も「そうや、そうや」と大声をあげた。

「姉ちゃん。そんなチンケな男はほつといて、ワシらとええことしようやないか。ええやろ？ みんなで楽しもうやないか。その兄ちゃんもワシらの意見に賛成やと思うで。怪我したないしな」

奇抜な髪 of 男の一人が、ニヤニヤしながら脅すような口調で言った。久美と可奈子はすっかり酔いが醒めている。二人は神人が倒され、自分たちが男たちに弄ばれるところを想像し、恐ろしさのあまり泣き顔になっている。

「二人とも大丈夫ですよ。僕が必ず守りますから安心してください」恐怖に怯えている二人の心情を察し、神人は男たちに聞こえないように小さな声で言った。自信たっぷりのその言葉に二人は心が軽くなる気がしたが、相手は五人だし、神人よりもはるかに強そうに見える。いくら神人の言葉を信じようとしても、神人に勝ち目があるとは到底思えない。

そうは言っても久美と可奈子の二人は神人にすぎる以外に方法が無い。二人は本能的に神人の後ろに下がった。男たち五人は、いずれも神人より体格的に勝っている。その状況から、男たちは完全に神人を舐めていた。

「ということで兄ちゃん、おんどれは帰ってくれへんか。今すぐやぞ。心配すなや。可愛い子ちゃんはワシらが責任持って面倒みたるからな」

リーダー格の男が脅しを掛けながら神人に近寄ってきた。男たちは神人が逃げるものと思って、それぞれ威嚇のポーズをしながら近づいてきた。

神人は少しずつ下がりがりながら男たちの意識を覗いてみた。魔虫が

いるかどうかを確認するためだ。魔虫がいたのはリーダー格のパンチパーマの男だけだ。魔虫は退治しなければならない。そのままにしておくと、善良な市民が犯罪に巻き込まれることになる。

神人に近づいていた五人の男たちの足が止まり、全員が恐怖の表情に変わった。決してそれに触れてはならない、決してそれに関わってはならない、それとは想像を絶する恐怖。男たちは神人の瞳の奥に、それを見たのだ。否、神人が見せたのだ。

「ちよつと待つて。すぐに戻るから」

怯えた表情の二人に言い残すと、悲鳴を挙げて我先にと逃げ始めた男たちを神人は追いかけた。久美と可奈子が見ているので、男たちより若干速い速度で走った。リーダー格の男だけは四人とは逆に路地へ逃げた。神人は彼を追った。

久美と可奈子が見えなくなったところで一気に加速すると、すぐに男に追いついた。行く手を遮られた男は、神人の右手に握られている不気味な光を放っている日本刀を見て、その恐怖から全身が強ばって動けない。今までは一般の人たちを脅していたのが、今は逆だ。

男の思いなど無視して、神人は愛刀の魔殺剣を水平に振った。凄まじいスピードだ。どんな武術の達人でもプロの格闘家と言えども、避けきれない速さだ。男は死を覚悟した。魔殺剣が頭を切った音が聞こえた。

男は自分が死んだと思ったが、目を開けてみると生きている。何も変わっていないが、心が晴れやかになったような、頭の中のモヤが取れたような、スッキリした気分だ。目の前には神人が優しい笑みを浮かべて立っている。

男から暴力的な匂いは消え、普通の若者の匂いに変わっている。表情も野獣の表情から柔和な表情に変わっている。信じられないよ

うな変わり方だ。神人は男の意識に巢食っていた魔虫を切ったのだ。男の様子を確認した神人は、久美と可奈子の元へと戻った。

「神人君、大丈夫？ あの人たちはどうしたん？ なんで急に悲鳴をあげて逃げ出したん？」

二人が思っている事を、久美が矢継ぎ早に問いかけてきた。

「たぶん酔っ払ってて、僕の顔が鬼にでも見えたんじゃないの。それでビククリして逃げたんだよ。さあ、それより早く帰ろう。またあんな奴らに絡まれたらイヤだからね」

神人はいい言葉が思いつかなくて適当にお茶を濁したが、二人は腑に落ちないという表情をしながらも、早く帰りたくてタクシー乗り場に向かった。

二人がタクシーに乗るのを見届けた神人はビルの陰に隠れると、予約しているビジネスホテルの近くにテレポートした。ホテルには遅くなることを連絡してあるので問題は無い。

部屋に入るとシャワーを浴びるためにシャツを脱いだ。全く贅肉のない引き締まった肉体は、惚れ惚れするほど綺麗だ。六つに割れた腹筋、逆三角形を形作る発達した広背筋、盛り上がった大胸筋と太い上腕二頭筋、それは神人が思春期を迎えた頃からあこがれていた理想の肉体そのものだ。その肉体を手に入れた神人は、ナルシストかと思いつつも自分の肉体に見入った。

シャワーを浴びた神人は、ベッドに入るとすぐに寝息を立て始めた。深い眠りについたところで、神宇宙に住んでいる神が現われた。

「神人よ、神等力を私利私欲に使ってはならない」

神は子供に教えるように優しい声で話しかけてきた。実際に声が聞こえているわけではないが、そう思える。

「わかっています。神等力を身に付けてまだ日は浅いですけど、私利私欲には使っていません」

「神等力は、困っている人や悩んでいる人などを助けるために与えたものだ。今夜お前がレポートしたのは私利私欲にあたる。神等力を使わなくても帰れたはずだ」

神の言葉に、「しまった！」と思った。確かにそのとおりだ。迂闊だった。神人は私欲でレポートしたのではなかったが、深夜ということもあり、タクシーを待つて無駄な時間を使うよりと思いテレポートしたのだ。

「言われるとおりです。私が間違っていました。言い訳するつもりはありません。罰は受けます」

神等力を授かって、それをいきなり私利私欲のために使ってしまった以上、どんな罰も受けるつもりだ。神の罰だからどんなものなのか、考えてみてもまったく想像がつかない。

「神人よ。悪意があつてのレポートではないから、罰を与えたりはしない。神等力は困っている人たちのため、自分の身を守るために以外に使ってはならない。よいな」

「はい、分かりました神様」

神が消えると、神人は深い深い眠りへと落ちていった。

翌日、神人が始業時間の三十分前に大阪営業所に出社すると、所長の阿部と部下の大石が出社していた。

「おはようございます。所長も大石さんも早いですね」

「おはようさん。昨夜は彼女らに捕まって、遅かつたんやないんか？」

阿部が関西弁丸出しで言った。その表情はお疲れさん、と言っているように見える。

「カラオケに連れて行かれたんですけど、ちょっと疲れました。もうカラオケは懲り懲りです」

「やっぱなあ。そうやと思った。アッハッハッハッハ」

そこへ大沢久美が入ってきて神人を見るなり質問してきた。

「神人君おはよう。昨日は、なんやつたん？ あれから何ともなかったん？」

「神人、なんかあつたんか？」

久美の言葉に阿部が新聞を読む手を休めて、心配そうな表情で尋ねた。その目は言葉とは別に、トラブルでもあつたのか？ と言っている。

「まあ大したことじゃないです。カラオケの帰りに変な奴らに絡まれたんですけど、何事もなく済みましたから・・・」

神人はこれ以上突っ込まれなくなかったので、どうってことはなかったと言うように大きな欠伸をしながら、阿部の好きな野球の話に持っていった。阿部は虎キチと言われるほどの阪神ファンだ。

「阪神調子いいですね。この分だと優勝かもしれませんよ」

「お前には悪いんやけど、今年はいただきますや。まあ、中日も頑張ってるけど、もうちょい頑張りが足らへんな」

五分ほど野球の話で盛り上がり、神人の思ったとおり昨日の件は話題から消えてしまった。久美はもう少し昨夜の話を聞きたそうな表情だったが、野球の話に熱中している阿部を見て、そのまま自分の席へと着いた。

今日の神人の予定は松永と同行訪問だが、松永はなんだか元気がない。松永の話によると、客先へ納入したアプリケーションソフトに不具合があり、復旧に一時間ほどかったそうだ。

そのために客先の業務に支障をきたし、発注担当者からペナルティを要求されていた。不具合の原因はお客の仕様が間違っており、松永としてはその仕様に合わせてSEに作ってもらっただけで、落ち度はお客にあるということだ。

そうは言っても売り手と買い手の関係から強く言えないこともあり、今回の件も松永の責任になりつつあった。発注担当の萩原は、自社の仕様間違いを見逃した松永のほうに責任があるという、言わば責任転嫁、屁理屈をバイイングパワーで認めさせようとしているのだ。

萩原は仕入先に対しては常に高飛車の態度だ。ネゴ交渉にしても一方的に自分の金額を押し付け、それに反論しようとすると、「今後の取引は無し！」と言う脅し文句を言い、無理やり自分の条件を飲ませるのだ。

今回の不具合もそのやり方だ。萩原の言うことを飲んだ場合、ペナルティを支払わなければならない。そうかと言って仕様の不備に持ち込むと、今後の取引に影響が出ることになる。にっちもさっちもいかない状況に、松永を含め所長以下全員が困り果てていた。

「神人。なんか名案あらへんかなあ。ほんまにあの萩原いう担当者はなんともならんのだ。そやけど大口の取引先やさかい、取引中止になったら痛手やし・・・」

松永は本当に困った様子で、まったく元気がない。萩原からは、ペナルティを払うと言つ返事を持って来いと言われている。

「松永さん、今日その萩原さんと話されるときに、僕も同席させてください。何とか上手くいくように話をしたいと思うんで」

「よろしく頼むわ」

口では言いながら、松永には神人の言葉は単なる気休めにしか聞こえない。それが表情にも表れているが神人は気にしない。

松永は名案もなく重い気分のまま萩原の勤める会社の玄関を入ると、受付で萩原に連絡を取ってもらった。応接室で五分ほど待たされて萩原が現れた。態度と表情に性格の悪さが表れている。神人は萩原の考えを読んでみた。

「なんとしてもペナルティを払わせてやる。断ったら取引中止で脅してやる。お前らみたいな中小企業は、俺には絶対逆らえないということを見せてやる。悪いのは俺のほうだが、お前らは俺の尻拭いをする運命なんだ」

萩原の考えを読んだ神人の怒りに火がついた。萩原の中に魔虫が見えた。神人は萩原に恐怖を見せるべく視線を合わせた。その瞬間、萩原は悲鳴を上げんばかりの表情になったが、両手で口を押さえるのと、かろうじて悲鳴を止めることができた。

「萩原さん、大丈夫ですか。どうかされましたか？」

松永は何が起きたのか分からないまま言った。萩原の視線は神人に釘付けになったまま動かない。松永はその視線の先には神人しかいないと知っていたが、今の状況を確認するために、ゆっくりと神人のほうを見た。

松永と目が合った神人は、「いったいどうしたんでしょう？」という表情で答えると、松永に念を送り気絶させた。

恐怖におののく萩原を更なる恐怖が襲った。いつどこからどうやって出したのか、神人の右手に不気味な光を放つ魔殺剣が握られて

いたのだ。

「ギャアアア」

萩原は今度は悲鳴を抑えることができなかった。その悲鳴と同時に、神人は魔殺剣を萩原の顔面めがけて水平に振った。常識的に考えれば萩原の頭は水平に切断され即死の状態だが、頭には傷ひとつない。神人は萩原の意識に巣くっている魔虫を切ったのだ。

萩原の悲鳴を聞きつけて、受付の女性と近くにいた男性社員が応接室に駆け込んできた。彼らは最悪の状況を想像していたが、目にしたのは穏やかな表情で座っている萩原の姿だった。

「萩原さん、大丈夫ですか！ 今悲鳴が聞こえたんですけど・・・」
 「ああ・・・、なんでもない。大丈夫だから気にしないでくれ・・・」

萩原の言葉に腑に落ちないという表情で首を傾げながら、受付の女性と男性社員は出て行った。神人の手に魔殺剣が現れてから魔虫を切るまでの時間は、わずかに十秒ほどしかかかっていない。松永が気を失っていたのも三十秒以内だ。その短さに松永自身、気を失っていたことに気づいていない。

「松永さん、今回の件は私どもの仕様の間違いが原因です。御社に落ち度はありません。ソフトの不具合を修正してもらった費用は払いますので、見積を持ってきてください」

松永は夢を見ているとしか思えない。これが夢でなければ、いったいどうしたというのだ。松永は萩原に見えないように右手で太ももをつねってみると、夢でないことが確認できた。

「松永さん、今までいろいろと理不尽なことを押し付けて、申し訳ありませんでした。今私は本来の自分に生まれ変わりました」

萩原の言ってる意味を理解できない松永が、恐る恐る口を開いた。

「萩原さん、私は頭が悪いので言われてる意味が理解できないんですけど・・・」

「私はたった今、まともな人間に生まれ変わったんです。今の私の姿が本来の私の姿です。上手く言えないんですが、今までは悪魔に

操られていたようなものです」

「はあ、正直なところ何と言っているのか分かりませんが……。今後ともよろしくお願い致します」

松永は萩原のあまりの変わりように、頭がおかしくなったのではないかと思ったが、結果的に良い方向へ変わったので一気に気が楽になった。

その後五分ほど雑談になったが、萩原からはさっきまでの意地悪そうな怒ったような表情は消え、柔和で優しい顔つきに変わっている。大げさに言えば、劇的に変わったと言っていいほどの変わりようだ。

「萩原さん、本日はお忙しい時間を割いていただきまして、ありがとうございました。これで失礼致します。早急に見積を作りましてお持ちいたします」

「こちらこそありがとうございました。見積を頂いたらすぐに処理します。今後ともよろしくお願いします」

萩原は深々と頭を下げた。今までの萩原を知っている松永にとって、全く信じられない光景だ。松永は帰りの電車の中でも、おかしい、おかしいを繰り返し返しながら萩原のことを考えていた。

「やつぱり、おかしい。神人。萩原さんは一体どないしたんやろ？　なんで、急に変わったんやろ？　奇跡以上の変わりようや」

「理由はどうでもいいんじゃないですか。結果的に良いほうへ変わってくれたんですから・・・」

魔虫を切ったとは言えないし、自分の能力のことを明かすわけにもいかない。神人はさりげなく話題を変えるように答えた。

「そやな。いくら考えても分からへんし、もう考えんどこ。まあ、いずれにしろ良かった、良かった。これで一件落着や！」

会社に戻った松永は、萩原の一件を所長の阿部に報告した。阿部

はしばらく考えながら、松永が思っていることと同じ事を口にした。
「地球環境の変化が影響してるんですよ。うん、それしか考えられない。きっとそうだ」

大阪営業所での一週間は無事に過ぎていった。考えてみれば、萩原とのトラブルを解決するために来たような気がしたが、それが偶然か必然かは考えても答えが出るはずはなかった。

「どうしたんだ神人？ 何か不満でもあるのか？ 今の仕事が嫌なのか？ 理由を聞かせてくれ」

神人が出した退職届を見た営業所長の西村が、驚きを隠さずに言った。西村にしてみれば青天の霹靂としか思えない。神人が退職届を出す理由が全く思いつかないのだ。

「不満はありません。仕事が嫌になったということもありません。皆良い人ばかりだし感謝してます」

「だったらどうして辞めるんだ？ 訳を教えてくれないか・・・」
「いろいろと考えたいことがあって、しばらく仕事を離れたいと思
いまして・・・」

「分かった。お前は毎日よく頑張ってくれてるし疲れてるんだ。しばらく会社を休め。何も辞めることはないだろう」

「氣遣っていただきありがとうございます。でも僕の気持ちは変わりません。ワガママだと思って許してください」

神人は深々と頭を下げた。神人の意志の固さを感じた西村は、これ以上引き止めることを止めた。何か人に言えない事情があるのだろうか、神人が真の理由を言ってくれないことが寂しかった。

六月末、残件や引継ぎを終わらせ会社を辞めたが、辞めた理由が神人自身にも分からない。何故だか分からないが辞めないといけな
いような気がして、ほとんど衝動的に退職届を出したのだ。

西村に引き止められたときは残るべきだと思ったのだが、何か強い力で強引に辞める方向に持っていかれたような感じだった。自分の意志ではなかった。何かしら目に見えない大きな力が働いたような感じだった。

「神人、どうして辞めたの？ イヤになったわけじゃないんでしょ？」

「母さん、俺のワガママだと思って何も聞かないで。いろいろ考えることがあってね」

そう言いつつも、今でも辞めた理由が分からない。

「お父さんも私には理解できない部分があったけど、あなたもお父さんと同じね。でも神人、あなたを信用しているから、自分の信じるとおりにやりなさい。たぶんお父さんも、私と同じ思いだと思うわ」

「母さん、ありがとう。大丈夫だよ」

「ところで一生遊んでるわけではないでしょう？ 転職先は決めるの？」

「今のところ何も決めてないし何も考えてない。でも就職はするよ。食べていけないといけないからね」

会社を辞めた翌日、朝九時に起きてきた神人は、用意してある朝食を食べながら朝刊に目を通していったが、興味を惹くような記事は無い。普段はあまり見ることもない広告のチラシに目をやると、スポーツクラブのチラシが目についた。自宅からクルマで二十分ほどの距離にある。

「全国チェーンのスポーツクラブか。身体が鈍らないように入会してみるか」

そう呟くとスポーツバッグにジャージなどを詰め込み、スポーツクラブへとクルマを走らせた。転職活動をしなないといけないのだが、一ヶ月ぐらいはゆっくりするつもりだ。

受付で入会手続きを済ませ、一通り施設の案内をしてもらい説明を受けた後、ジャージに着替えた神人はストレッチから始めた。ほとんどの人が短パンにランニングシャツというスタイルだが、神人はジャージ姿だ。その見事な筋肉が人目につかないように、あえ

てジャージースタイルにしたのだ。

神彦から神を引き継いでからは肉体的にも大きく変化していた。そのなかの一つが柔軟性だ。床に座って全開脚で胸を床に付ける、いわゆる股割りを難なくやってのける神人に、隣でストレッチをやっていた老人が声をかけてきた。

「はああ。お兄さん凄いな。身体が柔らかいんだね。私はごらんのとおり枯れかかっているんで、これだけしか曲がらないよ」

老人の足は直角にも開いておらず、顔をしかめながら必死で前に曲げようとしているのだが、上体はほとんど曲がっていない。神人はテレパシーで老人の意識を覗いてみた。

老人の名前は北村豊作。八十四歳だ。腰に持病があり相当辛い思いをしている。病院で治療はしているものの一向に良くなりず、そういう理由から健康のために通っていると分った。

「おじいちゃん、僕はマッサージが得意なんです。もし良かったら少しマッサージしましょう」

神人は、あぐらに座りなおした豊作の後ろに行くとなりを揉み始めた。ゆつくりと優しく神等力の気を注ぎながら。豊作は何とも言えない気持ち良さそうな表情でうつらうつらし始めた。

肩から背中、腰、腕とマッサージをしながら気を注いでいく。マッサージ自体は軽く擦っているという感じだが、気の効力で何とも言えない心地良さなのだ。約五分ほどマッサージした神人が、最後に軽く豊作の両肩をポンと叩いて、特別マッサージは終わった。

「ああ、気持ち良かったあ。お兄さん、本当に上手だね。身体が軽くなったというか、二十代の頃に戻ったような感じだよ。さてと自転車こぎから始めるとするか・・・」

豊作は立ち上がった瞬間、驚いた表情で神人を見た。

「腰が治ってる。ほおう、何と言ったらいいか、まるで身体が全部新品と入れ替わったみたいだ。お兄さん、あんたのマッサージは凄いな」

実際のところ、豊作の身体の悪いところは全て完治していた。神等力の気は特定の部位ではなく、悪い患部全てに効果を発揮するのだ。

「私は北村豊作と言います。お兄さんは？」

「天乃神人と申します」

「天乃さん、あそこで自転車こぎをやってる三人だけど私の茶飲み友達なんです。この歳になるとどこかしら体調が悪くてね。今日でなくていいんだけど、彼らにもマッサージをしてもらえないかな？」
神人は正直なところ困ったことになったと思った。自分の力が口コミで伝わりと取り返しの付かないことになる。神等力でも口コミは止められないからだ。

豊作を促すように神人は右手を彼の背中に当てた。神等力に出来ないことはない。豊作の記憶の一部が消えたが、豊作はそのことには気づいていない。あとで考えても、なぜ体の悪いところが治ったのか分からないはずだ。

自転車こぎをやってる三人のところに向かった豊作とは別に、神人はランニングマシンに乗るとスイッチを入れた。一時間ほどランニングしたが、まったく息切れしていない。リラックスしているときと同じ呼吸数、同じ脈拍だ。

次に筋トレマシンで軽くトレーニングをすると、満足した笑みを浮かべた。マシンの負荷は最重量になっている。約二時間ほど運動をしたあと、気分爽快といった感じでスポーツクラブを後にした。

第2章 運命を変えた首吊り自殺

蒸し暑い5月半ば、肩を落として帰ってきた真吾はスーツの上着をリビングのソファアの上に脱ぎ捨てると、面倒くさそうに外したネクタイも放り投げ、疲れきったようにソファアに倒れこんだ。

「ああゝあ、疲れた・・・」

真吾はその言葉を言うのが精一杯というようにしか見えないが、妻の静江には真吾の次の言葉が分かっていた。

「辞めたい・・・」

蚊の鳴くような小さな声で真吾は呟いた。それは独り言なのか静江に聞いて欲しいのかは、真吾にしか分からない。静江に聞こえているはずなのに、静江は何も言わない。真吾はその無言の状態が耐えられなかった。

「もうイヤだ。どうして俺だけこんな目に合わないといけないんだ・・・」

静江に何か言ってもらいたかった。何でもいい。とにかく声を掛けてもらいたかった。自分が今苦しんでいることに、関心を持ってもらいたかった。

「晩御飯冷たくなるわよ。早く食べたら・・・。それとも、先にお風呂に入る？」

静江の言葉は真吾の期待するものではなかった。

「風呂に入る・・・」

小さな声で答えると、真吾は肩を落として風呂場へ向かった。静江は真吾の悩みも気持ちも痛いほど分かっていたが、それを解決す

るための答えを持っていない。自分がしてやれることは、黙ってグチを聞くことだと思っている。

杉山真吾は今年で入社十五年になる。三十七歳だ。子供は四歳の長女と二歳の長男の四人家族だ。子供が小さいので静江は働きに出ることが出来ない。二年前に念願の一戸建て住宅を手に入れたが、三十年という長期ローンが始まったばかりだ。

悩んでいる真吾の足かせになっているものが二つあった。住宅ローンと家族だ。「ローンが無かったら・・・、独身だったら・・・」その二つの「・・・たら」がなければ転職するつもりだった。給料は安くなっても構わない。とにかく、今の会社から逃げ出したかった。それが出来ない真吾の辛い心境を、口には出さずとも静江は分っている。

三十分ほどして真吾が風呂から上がってきたが、風呂上りに必ず飲む発泡酒を飲まない。今夜は特に元気がなさそうに見える。思いつめた様子にも見える。何か不安がよぎったが、静江は声を掛けるのをやめて二人の子供と寝室へと入っていった。時間は午後九時を過ぎたところだ。

ピポポ、ピポポ、ピポポ、救急車のサイレンの音が、時々耳にする音とは違って泣いているように、静江には聞こえる。「いやだ!」「いやだ!」と、子供が泣きじゃくっているかのようだ。

運ばれているのは真吾だ。呼吸はしているものの意識はない。風呂から上がった真吾は、静江と子供たちが寝室に行った後、自宅のカーポートの鉄骨に縄跳びの紐を掛け、首吊り自殺をはかったのだ。玄関の音がしたのを不審に思った静江が外に出てみると、真吾が首を吊って苦しんでいるのが見えた。パニックになった静江は悲鳴をあげ、転びそうになりながら真吾に駆け寄った。

悲鳴を聞いた隣に住んでいる藤岡隆が、大学生と高校生の息子と

一緒に飛び出してきた。隆が手際よく息子に指示し、真吾の首に巻きつけていた紐はすぐに外された。発見が早かったので死には至らなかったが意識はない。

隆の指示で大学生の息子が救急車の手配をした。救急車が到着したのは八分後だった。子供のことを隆にお願いした静江は、真吾と一緒に救急車に乗り込んだ。

救急車が来たときには、静江は少し落ち着きを取り戻していたが、意識を無くして運ばれている真吾を見ると、何も力になってやることが出来ない自分が情けなかった。どうして一言言ってくれなかったのか、死という最悪の選択をせざるを得なかった真吾が哀れでならない。体中の水分が全て流れ出るのではないかと思えるほど、止めどなく涙が溢れてくる。

病院に搬送された真吾は直ちに精密検査を受けた。命に別状はないことが分っていたので、静江は内心ほっとしていた。あとは意識が戻るのを待つだけだ。さっきとは違って気持が少し楽になっていた。

気持は楽になったが検査時間がやけに長く感じられる。検査が始まってから二時間経過していたが、感覚的には倍以上の時間に感じられる。検査が終わったのは、運び込まれてから四時間後だった。

病室に運び込まれた真吾は、まだ意識が戻っていない。病室のドアには面会謝絶の札が掛けられた。果たして、どのくらいの時間が経てば意識が戻るのか全く分らない静江は、一抹の不安を覚えながら担当医の説明に耳を傾けた。

「奥さん、検査結果ですが、ご主人の命に別状はありません。その点に関しては心配いりません。首吊り自殺ということもあって、脳に障害が起きていないかどうかを念入りに検査しましたが、幸い障害はありませんでした。後遺症はないと思います。今は眠っているというか気を失っている状態ですが、意識が戻れば今までと同じ普

通の生活に戻れます。今日一日入院して様子を見てから退院になります」

「ありがとうございます。よろしく願います」

静江は目頭を押さえながら深々と頭を下げた。医者の説明に安心すると同時に、隣の藤岡に子供たちを預けてきたことを思い出した静江は、一旦自宅に帰ることにした。

自宅に帰ると藤岡隆がリビングで待っていた。心配そうな表情で静江のひと言を待っている藤岡に、静江は医者から聞いたことをそのまま告げた。

「良かった、良かった・・」

静江の説明を聞いて安心したのか、藤岡は一辺に疲れが出た様子で、自宅へと帰っていった。

藤岡が帰った後、静江は寝ずにリビングのソファに座って、今回のことを考えていた。気持ちが悪く落ち着いたとは言えあまりにショックが大きく、眠気はまったくなかった。

真吾が自殺を選んだ理由を知りたかった。口癖のように仕事辛いというのは聞いていたが、自殺するほど辛いとはどういうことかその理由を知りたかった。理由を知って自分が解決できるとは思わないが、自殺以外の選択肢を考えることは出来る。今のままでは再び自殺する可能性がある。

結局、静江は一睡もすることなく朝を迎えた。手早く支度をする、二人の子供と一緒に病院へ向かった。一晩経っているので意識は戻っているだろう。そんな思いで病室のドアを開けたが真吾の目は閉じている。部屋に入ると子供たちが声をかけた。

「パパ、おはよう！」

真吾は起きない。再び子供たちが声をかけながら頭に触ったが、それでも眠ったままだ。静江も声をかけ身体をゆすってみたが、起きるところか反応がない。呼吸をしていなかったら死んでいるよう

に見える。不安になった静江はナースステーションへ行った。

「もうすぐ主治医の先生がみえますので、説明があると思います。それまでしばらくお待ちください」

二十歳過ぎと思える看護士が事務的に言った言葉が、余計に不安を募らせた。真吾の身に何か重大なことが起きてるのか？ 考え始めると悪い方、悪い方へと思い方が広がり始めた。そんな思いで待っている主治医が入ってきた。

「おはようございます」

静江の不安を打ち消すかのように、主治医は明るい声で挨拶をした。昨夜処置した医者とは代わっている。四十歳ぐらいで優しい顔つきだ。静江は不安が和らぐのを感じた。

「先生、主人の容態はどうなんでしょうか？ 声を掛けても起きないんですけど・・・」

「結論から言いますと、ご主人はどこも悪くありません」

「ではどうして意識が戻らないんですか？」

「首吊り自殺ということで、脳への血流が止まるのを心配してたんです。血流が止まると脳に障害が出ますから・・・。検査した結果では、その心配はありませんでした。今の状態は眠っているような、昏睡状態のような感じです。昏睡状態と言っても、生命の危機に關するの意味は違います。意識が戻るまでこのまま様子を見ることにします。心配はいりません。大丈夫です」

医者言葉に一抹の不安はあるものの、静江の気持は軽くなった。子供たちは静江の気持を敏感に感じ取り、二人でふざけ始めた。

「静かにしなさい。パパが起きるでしょう」

「ママ、パパが起きたほうがいいんでしょう？」

「そうよね。ハハハハハハ」

杉山真吾が自殺未遂で入院してから三週間が過ぎていた。医者からはどこも悪くないと言われているにも関わらず、意識は未だに戻っていない。意識はないが、不思議なことに寝返りはしているみたいで、顔の向きが時々変わっていると看護師が言っていた。昏睡状態というより熟睡しているような感じた。

それから一週間が経とうとしているとき真吾の意識が戻った。ナースコールが鳴ったので、看護師が慌てて駆けつけたところ、意識の戻った真吾がベッドに座っていた。

「すみません。ここは何処ですか？ 私はどうなったんですか？」
まったく訳の分からない真吾が、寝ぼけたような感じで看護師に尋ねた。

「気分はどうですか？ 何か覚えてますか？」

「自宅に帰って風呂に入ったのは覚えています。それから・・・、気が付いたらここに居たという感じです・・・」

「そうですかあ。実は・・・」

看護師は、真吾が救急車で運び込まれてから今までのことを詳しく説明した。

「そうだったんですか。すみません、色々にご迷惑をおかけして・・・」

「それより奥さんに連絡されたほうがいいんじゃないですか？ ひどく心配されてますから」

看護師に言われ、真吾は病院内に設置されている公衆電話に向かった。携帯電話を持っていなかったからだ。五回の呼び出しの後、受話器が取られた。

「もしもし、杉山ですが」

「静江、俺だ。心配かけてすまなかった・・・」

真吾の声を聞いた途端、静江は小さな嗚咽を洩らし始めた。何か喋ろうとしているが言葉にならない。真吾は静江が落ち着くまで黙って待つことにした。時間的には一分ほどだったが、真吾には長く感じられた。落ち着いた静江が、不安と期待の入り混じったような声で尋ねた。

「もう大丈夫なの？ 何ともないの？」

「ああ大丈夫だ。心配掛けてすまなかった・・・。たぶん退院許可が出ると思うから、今日退院するよ」

「分かったわ。迎えに行くから待っててちょうだい」

静江は真吾がまた自殺に走らないかと心配だった。自殺に至った理由が分らない限り、それが解決しない限り、不安を拭い去ることはできない。迎えに行くのもそういう理由からだ。静江が病室に到着したときには、真吾は身支度を終えていた。

「パパ！」

二人の子供が、意識の戻った真吾に飛びついた。二人を抱きかかえた真吾に、自殺当時の思いつめたような表情は、微塵の欠片もない。静江の頭の中に一瞬、これで終わったのかという考えがよぎったが、それを振り払った。入院しただけでまだ何も解決してないからだ。

「痩せたみたいだよ」

真吾が呟くように言った。

「それはそうよ。点滴だけで何も食べてないんだから。それに筋力が衰えていると思うから、しばらくはリハビリが必要よ」

二人の子供と手をつないで真吾は病室を後にした。クルマのハンドルは静江が握った。真吾は入院前より痩せてはいるが、体調は良さそうで疲れた様子もなく、自殺をはかった同一人物とは思えない。

途中、ファミリーストランで昼食を取った。子供たちは久しぶりの外食で大喜びだが、真吾自身も久しぶりに味わう食べ物のに舌鼓を打った。今まで特に美味しいと思っていなかったファミレスの食事が、こんなに美味しく感じられたのは初めての経験だ。

昼食を食べ、自宅に着いたのは午後二時半だった。

「コーヒー入れるわ」

そう言うとき静江は台所へ消えた。真吾はソファに座ると、テレビのリモコンのスイッチを入れた。下の娘が真吾の膝の上に座り、上の娘は隣に座った。二人とも真吾の側から離れようとしない。余程、寂しかったのだらう。そんなことを思いながら、真吾はテレビに目をやった。チャンネルを色々切り替えたが、興味を惹くような番組はやっていない。

「コーヒー入れたわよ」

静江がコーヒーとジュース、帰宅途中の洋菓子屋で買ったショートケーキをテーブルの上に置きながら言った。子供たちは真吾から離れると、我先にとショートケーキを食べ始めた。そんな子供たちの姿を見て、真吾は自殺しようとしたことを後悔していた。テーブルの横に置いてあった朝刊を取ると、テレビの番組覧に目を通した。「おっ、今夜七時から面白い番組があるぞ」

「そう言うと思ったわ。マジックのスペシャル番組でしょう？」

「そうかあ。やっぱりお見通しだったか。アッハッハッハッハ」

明るく笑う真吾を見ていると、何故自殺しようとしたのか、その理由を聞きづらくなった。そうこうしているうちにリビングの時計が七時になり、点けっ放しのテレビはスペシャル番組を映し出した。六時半に夕食を終えていた真吾は、目を輝かせてその番組を見始めた。

「静江、見てみるよ。まるで魔法だ。マスクマンは間違いなく超能

力者だ」

独り言のように呟いた真吾は興奮していた。子供の頃から超能力や霊の存在を信じている真吾にとって、マスクマンは神に思える。マスクマンが演じる数々のマジックやイリユージョンは、神か超能力者でなければ出来ないと考えるほどで、真吾から見ればマジックではなく超能力だ。

「俺もマスクマンみたいな超能力があつたら、今の悩みはすぐに解決するのに・・・」

真吾が何気なく洩らした呟きが、静江の耳にはつきりと届いた。

「やっぱりまだ悩んでいるんだわ」

静江は真吾の呟きを聞き、不安な思いが広がっていくのを抑えることが出来なかった。

真吾は退院後も一週間会社を休んで、体力の回復に努めた。出社したのは八月の上旬からだ。その間静江は、真吾が発作的に自殺しようとするのではないかという不安から、真吾の近くに居るようにしていた。

出社の日が近づくにつれて真吾の様子が変わり始めた。元気がなくなり落ち込んでいるように見える。出社の前日になったとき、静江は自殺しようと思った理由を尋ねた。

「会社に悪魔がいるんだ。そいつが毎日俺を苦しめに来るんだ。苦しくて辛くてどうしようもないんだ」

「悪魔？ 悪魔って何のこと？」

「そいつから逃げるには自殺するしかないと思ったんだ。悪魔のせいで二人病気になった。あいつらと居ると生き地獄だ」

「悪魔って誰なの？」

「会社に行きたくない、行きたくない・・・もうイヤだ」

真吾は静江の言ったことには答えず、頭を抱えたままうな垂れた。このままではまた自殺に走るかもしれない。何としても今、原因を見つけないければならない。もしかしたら鬱病かもしれない。そんな考えが頭の片隅をよぎった。

時間は午後九時になっていた。子供たちは寝ている。静江はウイスキーを持ってくると真吾に勧め、自分も水割りを作った。静江は真吾が落ち着くまで何も喋らず、一緒にウイスキーを口に運んだ。しばらくして酔いが回ってきたのか、真吾が喋り始めた。

「そうだ。悪魔をやつつければいいんだ」

「そうよ。やつつければいいのよ。やっちゃいなさい」

悪魔が誰なのか分からないが、真吾の悩みを和らげるには同調するしかないと考えた静江は、オウム返しに答えた。

「悪魔は二人居るんだ。二人ともやつつけてやる！」

「やっちゃえ、やっちゃえ。二人ともやっちゃえ！」

ウイスキーの酔いと静江の言葉で気分が高揚してきた真吾は、何杯めかの水割りを一気に飲みほした。気のせいか静江には、真吾の眼光が鋭くなったように見えた。その瞬間だった。真吾が持っていたグラスが音を立てて割れたのだ。

「あなた大丈夫？ 怪我しなかった？」

「あつ・・・ああ・・・大丈夫だ。何ともないよ・・・」

静江の問いかけに真吾は、ふと我に帰ったような感じで答えながら、不思議そうな目で割れたグラスと自分の手を見ている。何か考えているようなその仕草に静江が尋ねた。

「どうかしたの？」

「いつ・・・いや、な、なんでもない。なんでもない・・・」

曖昧な返事をしつつ、何か納得のいかない表情をしている。

「グラスにヒビでも入ってたのかしら」

静江の言ったことを無視して、真吾は静江のグラスを手にした。

念入りにグラスを確認したが異常はない。右手にグラスを持った真吾はグラスに意識を集中し、さっきと同じように気持ちを高揚させ始めた。

テーブルの上のグラスの破片を片付けながら、静江は真吾の様子を見ていた。じっとグラスを見ている真吾の眼光が鋭くなったときだ。パキッ！ という音と共に、またしてもグラスが割れたのだ。

「あなた大丈夫！ 何ともない？」

「大丈夫だ。なんともない」

さつきと違つて真吾は力強く答えた。

「ふたつも割れるなんて変ね……。縁起でもないわ」

「このグラスは欠陥品だな。力いっぱい握っただけで割れるなんて」
「そうなの。安かったから買ったんだけど、やっぱり安物はダメね」
真吾の言ったことに納得したのか、静江はふたたびテーブルの上のグラスの破片を片付け始めながら言った。

「もう少し飲む？」

「いや、もういいよ。明日は出勤だから、これで寝るよ」

「あなた、この際だから明日も休んで椿大社へでも行つてきたら？
気持ちが悪くわよ」

三重県鈴鹿に位置する椿大社は、正式には椿大神社つばきおおかみやしんと言い、猿田彦大神を祀る神社の総本社とされている。

「そうだな。厄払いじゃないけど、悪魔払いしたほうがいいかもな」

翌日椿大社へ行つた真吾は、以前来たときと違って、何かしら大地の息吹きが身体に入っていくような気がした。力がみなぎってくる感じた。根拠はないが、自信が湧いてくるような感じた。

本堂へ行く途中で若者とすれ違った。真吾はその若者に何かを感じた。説明が難しいが、自分と同類の匂いだ。何が同類かは分からないが、自分と同じものを持つているような気がした。

約一ヶ月ぶりに出社した真吾に、同僚たちは労いの言葉を掛けてくれた。会社には体調不良で、一ヶ月ほどの入院が必要という診断書を出していた。静江は治療に専念させたいという理由を告げ、見舞いを断っていた。このため首吊り自殺をはかったということを、誰にも知られないですんだ。所長に挨拶をすると、

「一ヶ月も休んだんだから体調は万全だろ！　今まで休んだ分、しっかり働いてもらうからな」

一人目の悪魔は真吾の体調を心配するどころか、思いやりのかけらもない言葉を浴びせてきた。いつもなら悪魔の顔を見た途端、悪魔の朝のひと言を聞いた途端に憂鬱になるのだが、今朝の真吾は違っていた。悪魔の言葉が負け犬の遠吠えに聞こえる。

悪魔の言ったことに返事はせず、自分の机に行くとパソコンを立ち上げた。メールを開いてみると五百件ほど溜まっている。一件ずつ確認するだけでも、一日では終わらないほどの件数だ。

「杉山、一ヶ月も休んでたんだから、今日はその分、稼いで来い」

「課長すみませんが、メールが山ほど溜まっているので、それを先に確認します。大事な用件が来てるかも知れませんが」

「メールは帰ってきてからやれ。残業で出来るだろう。まずは客先へ行って来い。何としても売上をあげるんだ。分かったか！」

「坂上君、朝から何を怒鳴ってるんだ？」

「所長、杉山ですけど、今日は一日メールのチェックをすると言ってるんです。営業の仕事は客先へ行かないことには始まらないんで、客先へ行って来いと言ってるんですが・・・」

「杉山も子供じゃないんだから、そんなことは言われなくても分か

つてるはずだ。さつき俺も言っただけだからな。そうだな杉山」

「もちろんですけどメールが五百件ほど溜まってまして、お客様からの大事な用件があるかもしれないので、先に確認しようと思ってるんです」

「だからメールの確認は残業で出来るだろう。お客様に会うのは残業じゃダメだろう。そんなことも分からないのか。そんなことだから、お前の売上は伸びないんだ」

「杉山、坂上君の言うとおりだ。お前は何かに付けてやり方がまずいんだ。それが結果に表れてるだろ。まして一ヶ月も休んでたんだから、その分を取り戻さないといけないんだぞ。屁理屈ばかり言う暇があつたら早く出かける」

「悪魔め今に見てろ」

真吾は二人に聞こえないように呟いた。これ以上言っても、聞く耳を持たない悪魔には無意味だ。そう思った真吾は出かけることにした。会社の玄関を出た時、五歳後輩の川島が声を掛けてきた。

「杉山さんが休んでいる間、一昨年入社した浦川君が辞めたんですよ」

「えっ、辞めた？ 理由は？」

「言わなくても分かるでしょう」

「悪魔のせいかな」

「そうです。僕も転職先を探してるんです。このことは内緒ですよ。こんな会社に居たら、いずれ病気になりますよ。そうだ、二年前に辞められた野口さんと西山さんですけど鬱病でしたよね？」

「それがどうした？」

「噂によると、二人とも転職されてから治ったそうです。鬱病の人は注意して見ていないと発作的に自殺するそうですから、家族の方も心配されてたと思うんですけど、転職されて良かったですよ。杉

山さんも発作的に自殺するなんてことないですよ。あつ、冗談ですよ。冗談、冗談・・・」

川島の言葉に、「俺は鬱病なのか？」ふとそう思った真吾だったが、「そんなことはない！」と、その考えを振り払った。確かに悪魔に毎日怒鳴られていたら、病気になるまいほうがおかしい。

今までの真吾なら、夕方悪魔たちの質問攻めと説教が待っていることに憂鬱になるところだが、今日はそんな気分にはならない。営業車に乗り出発したが、客先へは行かず、人目に付かない喫茶店に入った。時間は九時半だ。

店内は半分ほど席が埋まっている。朝刊を手にとると奥の席に座った。見回すとほとんどの客がモーニングサービスを食べている。モーニングサービスはコーヒーの他に、トースト、ゆで卵、サラダが付いていてお得だが、朝食は済ませていたのでアイスコーヒーだけを注文した。

朝刊に目を通すと、大手デパートで売上金の内の三百万円が無くなるという小さな三面記事が目についた。第一発見者の店長がすぐに警察へ連絡し、調査が行われたが、いくら調べても忽然と消えたと言えないような状況だったと書いてある。普通に考えれば窃盗犯は売上金のほとんどを盗むと思えるが、わずか三百万円しか盗まれていない。

「盗むのなら全部盗めばいいのに・・・これは何かあるな」

そんなことを考えながら読んでいると、アイスコーヒーが運ばれてきた。真吾は何やら思いついたらしく、手に持ったストローを見つめたまま動かない。二分ほど経った頃、誰かの視線を感じ顔を上げてみると、二メートルほど離れた席に座っているサラリーマンと見える若者二人が、不思議そうな顔をして自分を見ている。真吾と目が合った二人は気まずいような表情で視線をずらすと、持っていた週刊誌を見始めた。

「あれ、詰まったのかなあ」

若者の一人がストローでアイスコーヒーを飲み始めたが、コーヒーが上がってこない。途中でコーヒーが詰まっているのだ。若者は代わりのストローを持ってくるようにウェイトレスに頼んだ。その光景を見ていた真吾は、ニヤリと笑うと一気にアイスコーヒーを飲み干し、喫茶店から出て行った。わずか五分ほど居ただけだったが、真吾には有意義で満足な時間だった。

第3章 感電事故と超能力

岩崎耕平は焼酎の水割りを片手に、安いアパートの部屋でテレビのスペシャル番組を見ていた。二時間の特別番組だ。出演しているのは最近急激に人気があがってきた若手マジシャンだ。年齢不詳で覆面レスラーみたいにマスクを被っている。本人はマジシャンではなく、魔操師と言っている。

最初はトランプを使った、オーソドックスなテーブルマジックだ。ゲストの芸能人五人が見守る中、鮮やかな手さばきで次々とトランプマジックを披露していく。そんなマスクマンを、スタジオの一般観客を含め全員が驚愕の眼差しで見ている。それはまるで魔法とは思えない。

テーブルマジックが終わり、イリュージョンと呼ばれるマジックになった。観客の度肝を抜いたのは、SF映画のスパイダーマンみたいに壁を這ってよじ登るマジックだ。これもマジックとは思えない。五人のゲストは目を丸くして声も出せないでいる。ゲストの驚きの表情を楽しむかのように、マスクマンは手を触れずに物体を動かすマジックに移った。

ゲストの一人から腕時計を借りると、テーブルの上に置いた。それに腕時計を貸したゲストがスカーフを被せた。当然のことながら、絹のスカーフは腕時計の形に盛り上がっている。

何が起きるのか、ゲストは期待感いっぱい表情で見ている。マスクマンは五メートルほど離れたところに置いてあるテーブルを指差した。テーブルの上には、腕時計に掛けたのと同じスカーフが置いてある。スカーフの下には何もないので、スカーフはテーブルに張り付いたようになっていいる。

マスクマンが、パチンツ！ と右手の指を鳴らした瞬間、腕時計

に掛けてあったスカーフがペシャンコになった。腕時計の膨らみがなくなったのだ。それとは反対に、五メートル先のテーブルの上のスカーフが、腕時計の形に盛り上がったのだ。

仰天するスタジオの観客やゲストを尻目にマスクマンはテーブルに近寄り、スカーフを持ち上げた。するとゲストから借りた腕時計が現れたのだ。

「すつげえ！ あいつは間違いなく超能力者だ。間違いない」

岩崎は酔いの廻った頭で考えながら力強く言った。マスクマンはその後も手を触れずにコップを動かしたり、電球を割ったりのパフォーマンスを見せつけた。岩崎の言うように、もはやマジックの域を超えて、超能力としか思えない。

「俺にあんな超能力があつたら、テレビなんかに出ないで一儲けしてやるのに。いや待てよ。もしかしたらマスクマンのやつ、裏では悪いことしてるかもしれないな」

本気とも冗談ともつかないことを言いながら、岩崎は焼酎を注ぎ足した。頭の中はすでに超能力者になった気分だ。最後までスペシャル番組を堪能した岩崎は、すっかりマスクマンのファンになっていた。それと同時に想像は大きく膨らんでいた。

岩崎はインターネットで超能力に関する情報を検索していた。どうしても超能力を身に付けたい、その一心で毎日毎日検索を続けていた。マスクマンはインタビューに対して、

「マジックか超能力か、あるいは魔法なのかは、ご覧になっている皆様の判断にお任せします」と言っていたが、岩崎は絶対に超能力だと思っていた。録画なら映像を加工することが出来るが、マスクマンは生番組で、多くの聴衆の前でやっていたからだ。

マスクマンみたいな超能力者は他にもいるはずだと思っている。

SF映画の『Xメン』みたいに姿を隠しているはずだと。岩崎は何としても彼らと接触したかった。もはや岩崎の頭の中は、SFの世界と現実の世界の区別がなくなっていた。

そんな岩崎は、職場で変人扱いされるようになっていた。SF好きの同僚は何人もいるのだが、岩崎の場合、好きという次元ではなく、度を越しているのだ。ネット検索以外にも、超能力に関する書籍はほとんど買っていた。

岩崎が勤めているのは小さな電気工事会社だ。社名は宮崎電気工事。社長を含めて従業員は八人で、元請会社からの請負工事がほとんどを占めている。岩崎は私立の工業高校を卒業後この会社に入り、五年が経っている。

ピーポー、ピーポー、ピーポー、救急車のサイレンの音が近づいてきた。その音が、「もう少しだ!」「頑張れ! 頑張れ!」と言いながら近寄っているように、高岡には聞こえていた。

救急車が停車するとタン力が降ろされ、意識の無い職人が乗せられた。彼の名前は岩崎耕平。仕事中にちょっとした不注意が原因で、事故を起こしてしまったのだ。

入社して五年が経ち作業もベテランになった岩崎は、今日の仕事も軽く考えていた。手慣れた作業ということと、超能力のことを考えていて注意力が散漫になっていたのが原因だった。基本中の基本である、電源が切れているかどうかを確認しないまま、作業を始めてしまったのだ。

電源が切れていると思い込み、尚且つ電気室が蒸し暑かったせいもあり、防護用のヘルメットを脱いで作業を始めた。これも決して許されない不安全行為だ。普段はこんなことはしないのだが、やはり仕事に集中していなかった。

事故はいろいろな条件が重なった時に起きるものだ。汗で濡れている岩崎の髪の毛が、二百ボルトの電圧がかかっている端子に触れてしまったのだ。その瞬間、感電して白目を向きケイレンしている岩崎に、一緒に仕事をしていた同僚の高岡が気づきすぐに電源を切った。その間、三秒も経っていなかった。

高岡は失神している岩崎の呼吸と脈を調べた。人工呼吸とAEDの使い方の訓練は受けていたが、幸い岩崎にその必要はなかった。すぐに救急車を呼び、病院へと運ばれた。

病院へ着くとすぐに精密検査が行われた。不幸中の幸いというか、奇跡的に何の障害も残らず、二日ほどで退院できることになった。

脳への感電のため、数ヶ月ほど前から今日までの記憶をなくしていたが、生活に支障はないと医者と言った。

二日後に退院した岩崎は、病院からそのまま出社すると、先ず社長へ謝りに行った。社長と言っても個人経営の小さな工事会社だ。名目上は社長だが、社員は皆、宮崎さんと呼んでいる。宮崎は社員にとって親父みたいな存在だ。中には、「オヤジ」と呼ぶ者もいる。岩崎は宮崎の机の前に行くと深々と頭を下げ、ひと言だけ言った。「どうもすみマセンでした」

「大事にならなくて良かった。安全第一！　いつも言ってるだろう。安全ということが身にしみただろう」

「正直なところ、数ヶ月前から病院で目を覚ますまでの記憶がないんです。高岡くんから状況は聞きましたが、なぜ電源を切らずにやったのか、まったく分からないんです。今まで一度もそんなミスをしたことはなかったのです・・・」

「くれぐれも気をつけるように。ああ、それと、まだ超能力に凝ってるのか？」

「えっ？　超能力って何のことですか？　僕と何か関係あるんですか？」

「超能力のことも忘れたのか。まあいい。アパートに帰ったら分かる」

何のことだろうと思いつつ、宮崎に背を向けて自分の席に戻ろうとした時だ。

「超能力なんか凝って困ったやつだ。そんなことだから変人扱いされるんだ」と、宮崎が言った。

「宮崎さん、僕のことを変人扱いしてるんですか？」

岩崎は立ち止まり振り向きながら言った。

「何を言ってるんだ？　俺は何も言っていないぞ」

「今、僕のことを変人と言ったじゃないですか・・・」

「黒木さん、俺は岩崎のことを変人と言ったか？」

宮崎は経理担当の黒木に、岩崎の誤解というか空耳を確認するために聞いた。黒木は四十歳のシングルマザーだ。十年前から働いているが、真面目で頭脳明晰で、宮崎の信頼を得ている。

「いいえ、宮崎さんはそんなことは言ってませんよ。岩崎さん、病み上がりでまだ調子が悪いんじゃないの？」

「変だなあ。確かに宮崎さんの声がしたんだけど・・・」

「岩崎、今日は現場に出るのは禁止だ。まだ本調子じゃないみたいだからな」

岩崎は宮崎の指示に素直に従った。正直なところ自分自身、数ヶ月の記憶喪失を自覚してても、それ以上になんだか思考が曖昧というか、何かが変わったような気がする。今の状態ではとても現場で作業は出来ない。それは漠然とした感覚であって、上手く説明できるものではなかった。

「岩崎、まだ本調子じゃないみたいだから今日は帰れ。ゆっくり休んで明日から出て来い」

「すみません。なんだか頭がぼんやりしていて自分でも良く分からない状態なので、帰って休ませてもらいます」

「何だこりゃ？」

安アパートの自宅に帰った岩崎は驚いた。部屋の中に超能力に関する本や、雑誌等からの切抜きが乱雑に散らかっていたのだ。その数は半端ではない。それらの本や切抜きを見ながら、あれこれと思い起こそうとしたが、何も思い出せない。

「これって本当に俺が集めたのかなあ。良くこれだけ集めたものだ」

半信半疑というより誰かがいたずらで置いたのか、あるいは嫌がらせをしようとしているのではないかなどと自分以外のことを考えていたが、切抜きに書いてある文字を見て、宮崎が言ったことを現実と思った。それは紛れもなく自分の筆跡なのだ。それもひとつふたつではない。ノートには今まで調べた超能力のことが、何ページにも渡って書いてある。

それを見ていた岩崎は、その内容自体に全く興味はなかったが、パワースポットのところだけ直感的にピンと来るものがあった。パワースポットとは大地の気がみなぎる場所のことだ。大地、言い換えれば地球。地球上で最大のものは地球。その気は創造を絶するほど強力なものだが、それを受け入れることが出来る人間はほとんどいない。もし地球の気を受け入れることが出来たら、その人間は超能力者となるのだが、人は脳の三パーセントしか使っていないために、受け入れるだけの能力がない。

「ふうん、パワースポットか。面白そうだな。ここに行けば体調も良くなるかも知れないな」

パワースポットはノートに書いてあるのを見ても、東海地区だけ

でも二十箇所近く存在する。その中で自宅から近いのは、三重県鈴鹿に位置する椿大社だ。

パワースポットと言っても、誰もが何らかのパワーをもらえると
いうものではない。パワースポットの発する気の周波数を受け取る
ことが出来る人間だけ、パワーをもらうことが出来るのだ。

分かりやすく言えば、パワースポットはテレビ局で、テレビが人
間だ。たとえばNHKがテレビ番組を発信し、見る側がチャンネル
をNHKに合わせると、その番組を見ることができる。

パワースポットも同じで、パワースポットが発信しているパワー
を受信できる人間だけが、その恩恵にあずかることができる。その
パワーは圧倒的なのだが、受信できる人間は何億人に一人いるか
いなかだ。

ただしパワースポットに來ると気分的なものかもしれないが、癒
されるような気分になるし、ストレスも緩和されるような気にもな
るものだ。

岩崎は境内の中央付近に來たところで、全身に何かを感じた。頭
の中のモヤが晴れて、スッキリしたような感覚だ。上手く説明でき
ないが、何かが身体の奥から沸きあがってくるような感じた。それ
がパワースポットの効果か、あるいは単なる気分的なものかどうか
は分らない。

境内をゆっくり歩きながら、大地の気のパワーを全身に浴びてい
るといった想いを胸に本堂まで來た。お賽銭を投げ入れ、かしわ手を
打った。考えてみれば、初詣すら行ったことがないのに、今ここに
居ること自体が変な感じに思える。

お参りが終わり引き返そうとした時、入れ替わるように來た三十
半ばぐらいと思えるサラリーマン風の男性が気になり、すれ違いざ
ま男性に意識を集中した時だ。男性の声がはつきりと聞こえてきた。
男性は黙って歩いているのに、声が聞こえるのだ。岩崎の頭の中に、
杉山真吾という名前が聞こえた。「俺の頭、おかしくなったのか？」

と思いながら、椿大社を後にした。

アパートに帰ってきた岩崎の頭の中は混乱していた。椿大社で感じた何とも言えない清々しい感覚。何か良いことがあるような、そんなウキウキ、ワクワクの気分と、サラリーマン風の男性の名前を知ったことによって。

杉山真吾という男性は常人ではないような気がした。一瞬だけだったので、彼の全てが分かったわけではないが、何か底知れない力を秘めているように感じた。

そんな思いを頭の隅に追いやり、散らかっている部屋を片付け始めたとき、なぜ超能力に興味を持ったのかを調べてみることにした。雑誌などの切抜きや、メモ書きを見ているうちに理由が分かった。

「そうかあ。マスクマンのマジックを見てからか・・・」

納得したように呟いた岩崎は、マスクマンをネットで検索した。調べてみると確かにマジックと思えない。同じマジシャンから見ればマジックかもしれないが、素人から見ると超能力だ。

「俺もアホだな。超能力に見えるけどこれはマジックだ。超能力が実際に存在するんだったら、それこそ国をあげて研究してるはずだからな。感電して頭が正常になって良かった。あやうく一生、変人扱いされるところだった」

自分のバカさ加減に半ば呆れながら部屋を整理し、超能力に関する本などは資源ゴミとして出すことにして紐で縛った。

岩崎は会社までマイカー通勤だ。入社して一年間、必死で貯金をして中古車を買った。貯金はそれでなくなってしまったが、子供の頃からクルマ好きの岩崎は昨年、借金をして新車のスポーツカーに買い換えた。タイヤとアルミホイールも買い換えた。給料のほとんどはクルマのローンだ。

結婚するにはまだ早いが、両親からは貯金をするように、会った

びに言われている。岩崎自身今の給料ではやっていけず、母親から借金することもある。

一攫千金を夢見てジャンボ宝くじを買い続けているが、一万円すら当たったことが無い。そのため、何か大金を手に入れる方法がないか、いつも考えていた。超能力に興味を持ったのは、超能力が使えるれば完全犯罪が出来ると考えたからだ。

事故を起こす前はそう考えていたのだが、今は全くそんな気はなくなっていた。なぜなら、超能力などあるはずがないと思っているからだ。それが事故のせいなのかどうかは分らないが、超能力にまったく興味が湧かないのだ。

翌朝出勤時に、昨日整理した超能力に関する本を資源ごみ置き場に捨てに行った岩崎は、同じように資源ごみを捨てに来ていた近所の主婦に会った。近所づきあいをしていないので、その主婦に会ったことがあるのかさえ記憶にないが、相手が挨拶をしたので挨拶を返し、その主婦に意識を集中した時だ。

「まだ新しい本じゃない。古本屋に持っていけばお金になるのに」主婦のそんな声が聞こえたが、主婦は何も言っていない。軽乗用車に積んできたゴミを降ろしてるだけだ。変だと思いつつも、紛れも無くはつきりと主婦の声が聞こえたのだ。決して空耳ではない。そう確信したが、主婦が喋ってないことも事実だ。変な違和感を覚えつつ、岩崎はマイカーで会社へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7112w/>

神様が宿る男

2011年10月14日07時55分発行